

# 人狼姉妹の物語

耀輝

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「私はRoseliaでギターを務めている氷川紗夜。見た目は人間と変わらないけれど、夜が訪れば私は違うものになる。」

「あたしはPastel\*Palettesでギターを担当している氷川日菜。あたしは見た目は普通の人間だけど、夜は別人になるんだ。」

「そう。私は…」

「あたしは…」

『人狼だから』

姉妹が揃って人狼である氷川紗夜と氷川日菜。この物語は人狼の氷川姉妹、そして彼女たちと彼女たち周辺の多くの人たちが作る物語である。果たして氷川姉妹の運命は如何に…

※本作はpixivでも投稿しております。更新周期は不定期になります。

# 目次

序章	
序章（一）	1
序章（二）	4
序章（三）	7
序章（四）	10
第一章：遭遇	
第一話 戸山香澄の遭遇	14
第二話 戸山香澄の遭遇の真相	18
第三話 今井リサと湊友希那の遭遇	23
第四話 Poppin' Partyの遭遇	28
第五話 遭遇の真相	32
第六話 白鷺千聖と丸山彩の遭遇	37
第七話 美竹蘭と青葉モカの遭遇	42
第八話 日曜日の真相	47
第九話 遭遇した者たちの話（一）	52
第十話 遭遇した者たちの話（二）	58
中間解説編と幕間話	63
第十一話 Pastel*Palettesの遭遇	68
第十二話 Roseliaの遭遇	75

## 序章

### 序章（一）

ライブハウス CiRCLEのスタジオ

スタジオではRoseliaが練習の真つ最中であつた。その時

友希那 「もうこんな時間ね。みんな、今日の練習はここまでにし  
ましよう。」

あこ 「はい！」

リサ 「みんな、今日もお疲れ〜」

友希那 「じゃあ、私とリサは次の予約してくるね。紗夜とあこと  
隣子はその間に片付けをお願いね。」

あこ 「はい！ わかりました！」

隣子 「では、氷川さん、あこちゃん、始めようね。」

スタジオ ロビー

友希那とリサが練習を終えて、次の予約をしていた。

友希那 「Bスタジオ、空きました。」

まりな 「あ、友希那ちゃんとリサちゃんね。お疲れ〜」

リサ 「ありがとうございます！それで、次の予約なんですけど、  
しばらくして、リサと友希那の予約が終わり、あこたちの片付けも  
終わっていた。

友希那 「あ、ちょうどみんな片付けたようだね。」

リサ 「そうね、じゃあ片付け終わったし、ファミレス行く？」

あこ 「うんうん！ 行こうリサ姉！」

隣子 「それなら私も。」

紗夜 「。」

リサ 「 紗夜は行かないの？」

紗夜 「。」

リサ 「紗夜？」

紗夜 「はい？」

リサ 「はい？じゃなくて、ファミレスだよ、ファミレス！ 紗夜は行かないの？」

紗夜 「あ、そうですか。ごめんなさい、今日は用事があったて 失礼しますね」

リサ 「あ、うん。分かった。」

友希那 「じゃあ私たちは行くから、紗夜も気をつけて帰って。」

あこ 「じゃあ紗夜さん、また後で！」

燐子 「では、氷川さん」

紗夜 Side

今日の練習が終わった。何とか夜になる前で終わったのだ。今は5時、夜になる前に帰らないと

紗夜 「日菜はどうしているのかしら」

私は Roselia でギターを務めている氷川紗夜、見た目は普通の人間と変わらないが、夜が訪れると別の人格が目覚めます。それは私の妹である日菜も同じだ。今は5時を過ぎていて、早く帰ろう。

Roselia の練習が終わるといつもこの時間。ファミレスにいくとしたら、用事があると言って誤魔化す。それが最も安全なことだ、夜の私は別人だから

リサ、友希那 Side

ファミリョレストラン

あこ 「そういえばりんりん、あの噂知ってる？」

燐子 「噂、あ、今広がってる噂だね」

友希那 「噂？」

あこ 「はい、狼の噂ですよ！お姉ちゃんから聞いたんですけど、夜になると狼の鳴き声があるっていう事です！」

リサ 「ええ!?なにそれ!？」

あこ 「あこもよくわからないけど、夜に狼の鳴き声がして、町に狼が彷徨いてるって」

リサ 「うわああ、マジで怖い噂だね、一体なんだろう」

友希那 「その噂が本当かどうかはわからないけれど、皆も夜になる前に帰った方が良いわ。」

リサ 「そうね、襲われるかもしれないし」

友希那 「みんな食べ終わったようね。それじゃ会計済ませて帰るわよ。」

しばらくして

リサ 「それじゃ、あこと燐子も気をつけて帰ってね」

あこ 「友希那さん、リサ姉、またね」

リサ 「ねえ、友希那 今日と一緒に帰ろう。今日はバイト無いし」

友希那 「そうね、早く帰ろう。」

帰り道

リサ 「ねえ、友希那」

友希那 「何？あの噂の事？私は別に信じないけれど、リサは？」

リサ 「ア、アタシ？アタシもべ、別に」

友希那 「そう。もう夜だから、早く帰——？」

帰ろうと言おうとしたその時に鳴き声でした。

リサ 「な、鳴き声？ど、どこから？ま、まさか例の噂が」

友希那 「リサ、落ち着いて。まだ鳴き声は遠くから聞こえるわ。

早く行こう。」

リサ 「う、うん」

確かにあこの言う通り、狼の鳴き声が聞こえた。でも、一体どこからかでも、この時間こえた狼の鳴き声はひとつではなかった。一体誰が

それから家に帰るまでは必死だった。あこが言った夜に狼の鳴き声があるという噂、その噂の真相を知るまでに、そんなに時間はかからなかった。

続く

## 序章 (二)

ライブハウス C i R C L E、カフェテリア

あこ Side

練習前の休憩時間、スマホをいじって例も噂を確認してみる。実はあこ、その噂をお姉ちゃんから聞いたことがある。夜に狼の鳴き声が聞こえるっていう噂を正直半分は疑ったけど、ある日の夜に狼の鳴き声を聞いたから噂を信じるようになった。一体誰なのか知らないけど、あこはその噂がますます気になった。

スタジオ、練習が終わる時間になって

友希那 「もうこんな時間ね。みんな、今日の練習はここまでにしましょう。」

あこ 「はい！」

リサ 「みんな、今日もお疲れ〜」

友希那 「じゃあ、私とリサは次の予約してくるね。紗夜とあこと

燐子はその間に片付けをお願いね。」

あこ 「はい！ わかりました！」

燐子 「では、氷川さん、あこちゃん、始めようね。」

あこ 「うん！」

紗夜 「？」

燐子 「まずは、氷川さん。」

紗夜 「あ、すみません。早く片付けましょう。」

燐子 「(氷川さん)」

あこ 「片付け終わりに〜お疲れ、りんりん！」

燐子 「うん、あこちゃんと氷川さんもお疲れ。」

紗夜 「じゃあ、行きましょう。」

あこ 「友希那さん〜、リサ姉〜！」

友希那 「あ、ちょうどみんな片付けたようだね。」

リサ 「そうね、じゃあ片付け終わったし、ファミレス行く？」

あこ 「うんうん！ 行こうリサ姉！」

燐子 「それなら私も。」

紗夜 「？」

リサ 「紗夜は行かないの？」

紗夜 「？」

リサ 「紗夜？」

紗夜 「はい？」

リサ 「はい？ じゃなくて、ファミレスだよ、ファミレス！ 紗夜は行かないの？」

紗夜 「あ、そうですか。ごめんなさい、今日は用事があったて。失礼しますね」

リサ 「あ、うん。分かった。」

友希那 「じゃあ私たちは行くから、紗夜も気をつけて帰って。」

あこ 「じゃあ紗夜さん、また後で！」

燐子 「では、氷川さん。」

この時の紗夜さんの雰囲気はどこか静かだった。何かあったのかな。

燐子 Side

ファミリールストラン

氷川さんを除いて私とあこちゃん、今井さんと友希那さん四人で、ファミレスにきた。氷川さんのことが気になったんだけど氷川さんなら大丈夫だろう。食事の最中、あこちゃんが話をかけた。

あこ 「そういえばりんりん、あの噂知ってる？」

燐子 「噂、あ、今広がってる噂だね。」

友希那 「噂？」

あこ 「はい、狼の噂ですよ！お姉ちゃんから聞いたんですけど、夜になると狼の鳴き声があるっていう事です！」

リサ 「ええ!?なにそれ!？」

あこ 「あこもよくわからないけど、夜に狼の鳴き声が出て、町に狼が彷徨ってるって。」

リサ 「うわああ、マジで怖い噂だね。一体なんだろう。」

あこちゃんが言った噂は学校でも広がっている。夜に狼の鳴き声を聞いた生徒たちの話や見かけたという話もあった。



友希那 「その噂が本当かどうかはわからないけれど、皆も夜になる前に帰った方が良いわ。」

リサ 「そうね・襲われるかもしれないし。」

友希那 「みんな食べ終わったようだね。それじゃ会計済ませて帰ろう。」

しばらくして

リサ 「それじゃ、あこと燐子も気をつけて帰ってね」

あこ 「友希那さん、リサ姉、またね」

帰り道

あこ 「それじゃりんりん、NFOで会おうね！」

燐子 「うん。先にログインして待ってるから。」

白金家、燐子の部屋

燐子 「あこちゃん、もうログインしてるのかな。」

それはゲームであこちゃんを待っている時だった——鳴き声が出たのは。

燐子 「(例の・鳴き声だね。すっかり夜になったな。)」

あこのチャット 「お待たせ、りんりん！あの鳴き声聞いた？」

燐子のチャット 「うん、聞いたよ。あこちゃんはその鳴き声気になる？」

あこのチャット 「あこもちよつと気になるよ。もしかしてりんりんも？」

燐子のチャット 「私も気になるね。いつわかるかは分からないけど」

NFOでこのチャットをしていた時は分からなかったが、私やあこちゃんが噂の真相を知るのは少し後のことだった。

夜の闇が訪れると共に今日の夜も鳴き声が響く。まるで夜の訪れを待っていたように。この鳴き声の正体を未だ誰も知らずに

続く

## 序章 (三)

芸能事務所 レッスンスタジオ

彩 Side

今日の練習が全て終わった。練習後の時間。

彩 「ふう……やっと終わったね……」

千聖 「みんな、今日もお疲れ。イヴちゃん今日は昨日より上手だったわ。」

イヴ 「かたじけない、チサトさん！マヤさんも練習お疲れ様です！」

麻弥 「皆さんご苦労様ですよ。そういえば、日菜さんは？」

彩 「…？日菜ちゃん、見えないね。どうしたのかな？」

千聖 「日菜ちゃん、練習終わってすぐに帰ったようね。何かあったかしら？」

麻弥 「いえ、自分も知りませんので」

イヴ 「私もヒナさんが気になりますね、何かあるんでしょうか？」

千聖 「ひとまずその話はあとにしましょう。後で日菜ちゃんに聞けば良いわ」

彩 「じゃあ、私はバイトがあるから先に行くね。またね！」

イヴ 「はい！お疲れ様です、アヤさん！」

麻弥 「じゃあ、自分も帰りますね。」

練習を終えてすぐにバイト先へ急ぐ。遅刻しないように……

ファーストフード店

花音 「あ、彩ちゃん！」

彩 「花音ちゃん、お待たせ！遅刻はならなくて良かった……」

花音 「じゃあ早く準備しようね。」

彩 「分かった、早く準備してくるね！」

間もなく……

「最近、町が変だよな？」

「でしょう？やはり居るんだよ！」

「怖いね…鳴き声がすると…」

「私、家にちやんと帰れるかな…」

花音 「最近、流行ってるね。」

彩 「そうだよね……」

私、丸山彩が狼の噂を耳にしたのはつい最近のことだった。毎日の夜に狼の鳴き声があると噂。この噂の真実が一体なんなのか、パスパレや学校、周囲の知り合いの中に色んな話が盛んでいた。夜中に狼が人を襲ってくるという恐れも交ざっていた。確かに狼に襲われると怖いかも…

彩 「確かに狼に出会したら、私ちよつと怖いよ」

花音 「そうだね…」

彩 「バイトが終わったら、早く帰った方が良いね」

花音 「うん…私も」

彩 「あ、暗い話しはもう止め止め！他の話しようかな？」

花音 「そうだね、彩ちゃん。最近こころちゃんがね——」

別の話をしていると、ちよつとは安心できる。花音ちゃんと話をしている間にバイトが終わり、急いで家に帰る。出会したら大変だから……

千聖 Side

例の狼の噂を聞いたのは学校からだだった。一体その狼は何物でどこから来たのか、私には未だ謎だらけだった。

千聖 「はあ…一体なんなのかしらね……」

SNSでは狼について色んな話が交ざっている。夜分に襲われるかも知れないから早く家に帰ろうという話、噂自体がデタラメだという話、他にも色んな話があるんだけど、本当の真相は未だ分からないまま。

噂からすればもうひとつ気になる事は日菜ちゃんだった。練習が終わったあと、日菜ちゃんはすぐに帰っていた。まるで何かあるみたいなのに、日菜ちゃんは答えてくれなかった。まあ、いつか答えてくれるでしょう。

空を見上げると、空はすっかり暗くなって月が浮かんでいた。

千聖 「(月…月か…)」

夜の月と狼の噂に関係があるかもという話しもSNSにあった。確か人狼と夜の関係性については色々な話があるから、有り得る話なのかも知れない。その狼が実は人狼だという話ならそうだけど。

この噂が本当かどうかについての真相は未だ謎々。その真相を知る時がいつになるか今の私には分からなかった。そうだ、その時まで……

帰り道

日菜 Side

あたしの名前は氷川日菜。アイドルバンドPastel\*Palettesのギター担当である。私にはおねーちゃんが居て、おねーちゃんと一緒にギターをやっている。

今日はパスパレ練習の日。練習が終わったあとすぐ帰路に着いた。もう夜になるから。帰る途中で携帯が鳴っていた。画面を見るとおねーちゃんからだった。

日菜 「もしもし、おねーちゃん？」

紗夜 『日菜、練習は終わったの？』

日菜 「うん、練習終わって直ぐに出たよ。今帰るところ。」

紗夜 『早く帰ってちょうだいね。分かるでしょう？』

日菜 「分かってるよ。早く帰ってくるね！」

あたしは夜になると普通の人間とは違う。夜には別人になるんだから……勿論その姿を見せたくはないけどね。あたしは急いで家へと走る。早く帰らないと……

続く……

## 序章（四）

麻弥 Side

自分が狼の噂を初めて耳にしたのは学園での話だった。正確にはお昼時間にAfterglowの話が聞こえてたのでそちらに行ってみた。

ひまり 「最近、なんか夜になると町が怖いよね。皆もそう思わない？」

つぐみ 「確かにそうだよ。狼が出るらしいから：」

麻弥 「（お、狼？夜に町に狼って？）」

蘭 「狼が出ると言ったら、モカの方ヤバいんじゃないの？」

モカ 「あたしのバイトは一応大丈夫だけどさ、夜に狼と出会ったらマジヤバいかも、夜は怖いですからなく」

麻弥 「（うう、夜に狼と出くわしたらどうするか怖いっすね…）」

巴 「そうだな、アタシも周りで狼についての色んな話を聞いているんでさ」

モカ 「おー、トモチんは何の話を聞いたんですかなく 教えてくださいね」

その時、自分は上原さんの視線を感じた。

ひまり 「：？あー、麻弥先輩！どうしたんですか、こんなところに？」

麻弥 「あー、Afterglowの皆さん！ちようど皆さんの話が聞こえたのでちよつと来ただけですよ！」

巴 「話ですか？あ、もしかして麻弥先輩も噂に興味あるんですか？」

麻弥 「噂？」

Afterglowの皆さんから聞いた話は夜に狼が町に出るといふ噂だったのだ。この話を聞いた瞬間、自分は思った。

何で狼が町に出るんだろう、普通狼は山奥で住むのになんで自分たち人が住む町に出るのかなどの疑問が頭をよぎる。

ひまり 「それで、みんな狼と出会ったらどうするか相談もするっ

もりでみんなと話をしていましたよ」

麻弥 「そうですね、自分運動は苦手で狼と出会ったら、逃げることもできないかもっす…」

つぐみ 「あー、でもでも！まだ狼が人を襲ったという噂は流行っていないから安心する方がいいんですよ！」

麻弥 「そ、そうですねー。それはよかったですねー。でもなんか話を聞くだけで怖いですね」

巴 「それで、アタシたちは日課が終わったらすぐに帰るつもりです」

モカ 「とりあえず自分の身が大事ですからねー」

蘭 「麻弥さんも気をつけるんですよ」

麻弥 「はい、自分も気をつけますね。じゃ、もう授業始まる時間なので、自分はこちらで！」

ひまり 「はい！気をつけてくださいね！」

Afterglowの皆さんと別れた後、この噂のどこまでが真実かを自分はまだ分からなかったが、この噂の真相に辿りつけるまでそんなに時間が長かからなかった。

イヴ Side

チサトさんとアヤさんでお昼を食べてる時だった。

彩 「もう学校にも広まったね、噂」

千聖 「そうね、狼の噂でみんな一杯だわ。」

イヴ 「狼の噂ってなんなんですか？」

彩 「イヴちゃんは聞いたことある？夜になると町に狼が出るという話を」

イヴ 「ツグミさんのカフェで何度も聞いたんですが、詳しく教えてくださいーアヤさん、チサトさん！」

千聖 「確か夜に狼が出るということはわかるかしら？」

イヴ 「はい、それはみんな聞いた話ですね！」

彩 「じゃあイヴちゃんは狼が吠える音も聞いたの？」

イヴ 「それも聞きました、夜になると町に狼が出るのは難しい話です！」

彩 「私もそうなんだけどね。なんで出たのかな…」

千聖 「今はその理由を考えても仕方ないわ。どこまでが真実で、どこまでが嘘なのか分からないから。でも、夜になると出る狼に気をつけることだけは変わりないでしょう?」

彩 「そうだよね、イヴちゃんも気をつけた方がいいかも知れないね」

イヴ 「はい、気をつけて損することはありませんからね!」

彩 「じゃあ、もうお昼時間終わるから早く行こうね。」

イヴ 「はい!」

イヴ 「(夜に狼が町に出るのは一体なんでなのでしょう?今は気になれども、夜には狼に気をつけながらその理由をゆっくり考えるしかありませんね)」

お昼時間が終わり私は授業に戻る。

今思えば私が噂の真相を知る時は意外と近かったのかも知れない。

現在、氷川姉妹の家

日菜 Side

やっと家に着いた。家に入るとおねーちゃんが待っていた。

日菜 「おねーちゃん、ただいま!夜になる前に帰ってきたよ!」

紗夜 「お帰り、日菜。」

日菜 「なんとか間に合ったね、おねーちゃん!」

紗夜 「そうね、早く来たわね。」

日菜 「もうそろそろだね、夜」

紗夜 「そう、間もなく目覚める時間よ。その前にまだ夕飯食べてないでしょ?」

日菜 「うん、まだ夕飯してないや。早く食べよ!」

Side X

姉妹の夕御飯の後、姉妹の家には秒針の音だけが響いていた。まるで姉妹の時間が刻々と近づいていることを報せるように。それに合わせて、姉妹の瞳はいつもの色が狼の瞳のように色づき始めた。そして時間になって人間の歯は狼の牙へと変わり、人間の体も狼の体へと変貌し狼の耳や尻尾も生えた。その変化が終わった姉妹は空に向け

て咆哮する。氷川姉妹は今、人狼として目を覚ましたのだ。

姉妹の咆哮はこの夜にも町に響いて空へ届く。これから姉妹に迫り来るであろう運命については全く知らずに……

「序章」 終わり



## 第一章：遭遇

### 第一話 戸山香澄の遭遇

香澄 Side

ある日、学校での日課が終わってポピパのみんなで有咲の家に行き、いつものように有咲の家で倉練が終わり皆と談笑してる時だった。

沙綾 「そういえば、最近夜には狼で町が騒がしいんだね」

たえ 「だね。なんか意外」

りみ 「どこが意外なの、おたえちゃん？」

たえ 「なんで町に出たのかな」

有咲 「ま、まあそれも有りだな。で、みんなどうするの？」

りみ 「狼が襲ってこないと良いんだけど……」

香澄 「うう…襲って来ないのかな？ゾンビみたい……」

有咲 「香澄、お前りみりとゾンビ映画を見すぎたんじゃねえのか？」

香澄 「ううう……」

沙綾 「ま、まあ。狼が襲ってくる事はないと思うよ…でも、最近町が騒がしいから夜には気をつけて帰ることに越したことはないでしょう？」

たえ 「多分ね。それに変わりはないから。」

有咲 「だな、じゃあ今日の練習はここまでして、後はみんな帰るか」

りみ 「そうだよね、もう夜になっちゃうから」

香澄 「うう、急に怖くなってきたよ。有咲く！」ダキッ

有咲 「ちよ、ちよっと離せよ香澄！」ジタバタ

香澄 「だ、だつて〜！」

沙綾 「香澄、もう帰るよ」

香澄 「ううう…（大丈夫かな、私……）」

香澄の帰り道

帰り道の空は日が西へと暮れかけていた。みんな練習の後すぐ帰ろうと言ったのに、帰り道でも心の不安が消えなかった。

香澄 「(ううう…今夜はずっと家に居よう…ううう…正直りみりんやこころんとゾンビ映画を見ていた時より怖いな…)」

その時だった——鳴き声がしたのは。その鳴き声でピタツと足が止まった

香澄 「えっ？(な、鳴き声？き、きつと噂では夜に狼の鳴き声がして…い、いや。嫌だなく、怖くて。うう、早く帰ろう…)」

香澄 「(うう…すつかり夜だよ。あつちゃんきつと心配してるのに…)」

ハシツテタ イツモハシツテタ アイトユウキヲトケタイ♪

香澄 「ひっ…！で、電話？だ、誰から？」

私のスマホが鳴っていた。電話は…あつちゃんからだった。やっぱり…

香澄 「もしもし、あつちゃん？」

明日香 『おねーちゃん今どこ？帰れないの？』

香澄 「ご、ゴメンねあつちゃん。もうすぐ帰るから」

明日香 『おねーちゃん、最近の噂知ってるでしょう？おねーちゃん心配だから早く帰って来て』

香澄 「わ、わかってるよ。もう帰るから、ね？」

香澄 「もう、あつちゃんは心配性なんだから…」

あつちゃんと電話を終えたその時だった、誰かの視線を感じたのは。

香澄 「…？だ、誰？」

視線を感じて振り返るとそこに『何か』が見えた。夜の闇に紛れて姿は見えないけど、鮮やかな黄色い目だけがそこに誰かがいることだけを知らせていた。そして——

『Grrrrrr』

香澄 「ひっ…?!な、何?!」

『Grrrrrrrr』

香澄 「(もしかして噂の狼!?!で、でも狼にしてはちゃんと二足で歩

いてる……)」

『それが近づいて街灯に照らされた時、私は直感した。噂の狼は普通の狼ではなく——』

『Grrrrrrrrrr』

人狼だったというのを——

香澄 「わあ~~~~っ?!」 ダツ

香澄 「(い、一旦走るしかない!)」

今はそれしかなかった!まさか、この町に人狼がいたなんて、思いもしなかったのだ。とにかくあつちゃんが心配してるから、最大限距離を取ることにした。

香澄 「(ううう……ゾンビより怖い!で、でも今は早く!)」

ギターの重さが走るのに邪魔になるんだけど、今は走るので精一杯だった。とにかく走った。

香澄 「はあ……はあ……はあ……はあ……」

いっばい走ったのか、息が苦しかった。人狼が追って来ないか確かめる為に振り返ると——

香澄 「えっ?!」

人狼は私を追いかけていた。驚いた私はもつと速度を上げる。追いつかれないようにいっばい走った。

香澄 「(も、もつと速く走るしかない!)」

それから——

香澄 「はあ、はあ、も、もう家に、着いたのかな……はあ、はあ……」

『戸山』

幸いにもやつと家に着いた。

香澄 「つ、疲れた……お、追って来ないのかな……?」

幸いだったのは、その人狼は私のあとを追って来なかったのだ。いっばい走っただけでもう疲れてきた……

香澄 「は、早く入ろう……」

戸山家

明日香 「おかえり」

香澄 「た、ただいま……」

明日香 「おねーちゃんなんか疲れてるね。どうしたの？」

香澄 「はあ、はあ、はあ、話しはあとにしようね、あっちゃん……」

明日香 「う、うん……」

香澄の部屋

香澄 「(ううう……今日見た人狼、みんなになんて話そうかな……人狼が町に居たなんて思いもしなかったよ！で、でもなんで人狼がいるんだろう?)」

人狼を初めて見た時は、驚くことがたくさんだった。なんで人狼が町に居るのかはまだまだ謎だった。そして、その人狼が誰なのかも私には気になった。

香澄 「(ううう……今日はもう寝るしかない……)」

今の私が懐いた謎はいつ解かれるか、それはまだわからないままであった。

「第一章… 遭遇」 一話 戸山香澄の遭遇 終わり

続く……

## 第二話 戸山香澄の遭遇の真相

香澄 Side

金曜日の朝、香澄の部屋

香澄 「ううう……」

昨日は結局ちゃんと眠れなかった。昨日夜に見た人狼がまだ頭から離せない。これからどうなって行くんだろう……

香澄 「今は考えても仕方ないね……とりあえずみんな有咲の家で待つてるから早く行こう」

有咲の家の前

たえ 「香澄、元気がないね」

沙綾 「香澄、何かあった？」

香澄 「……」

昨日見た人狼のこと、今はみんなに話せない。今もその話をするのが怖い。その時、有咲が家から出た。

有咲 Side

有咲の家の前

準備を終えて外へ出たら朝から香澄が私に抱きついてきた。

香澄 「ううう……有咲……！」 ダキ

有咲 「ちよ、香澄！朝から何抱きついてやがんだよ！」

香澄 「有咲くくくくく！」

その時の香澄の顔はまるで何かまずいことでもあったような顔だった。

有咲 「ちよ、何だよ！とりあえず離せよ、香澄！」

香澄 「私、恐かったんだよくくく！」

有咲 「なんだよ一体?!何があつたんだよ！」

沙綾 「有咲く、香澄く！そろそろ行こう！」

有咲 「分かった！ほら、香澄、早く行こう」

香澄 「ううう……」

りみ 「香澄ちゃん、何があつたの？」

沙？ 「さあね、今日会った時からずっとあんな状態だったよ」

たえ 「香澄……」

沙綾 「……とりあえず、香澄が落ち着くまではじつとしようね」  
この時の香澄は何を聞いてもちゃんと答えてくれるかどうか怪しかった。なぜなのか知らなかったが、香澄のこの顔は尋常じゃない気がした。

有咲 「(とりあえず今は香澄を落ち着かせねえと……話しはその後聞いても悪くねえだろう)」

午前中の日課はとりあえず香澄を落ち着かせることだけだった。香澄に何があつたのかを聞くのはその後の昼間時間香澄を呼び出して聞くことにした。

昼間時間

沙綾 「少し落ち着いた？」

香澄 「うん……」

有咲 「ふう……お前落ち着かせるだけで苦労したんだぞ……」

香澄 「有咲……ありがとう……」

りみ 「それで香澄ちゃん、昨日何があつたの？昨日ちゃんと帰つたの？」

香澄 「昨日はちゃんと帰つたよ。でも……」

たえ 「でも？」

香澄 「お、狼が……」

有咲、たえ、沙綾、りみ 「お、狼!？」

有咲 「ほ、本当かよ!？」

香澄 「うん……でもなんか普通の狼とは違つたよ……二足で歩いてたから……」

りみ 「二足!？」

有咲 「それ、もしかして……人狼?」

香澄は小さく頷いた。

有咲 「ほ、本当に人狼だったのか？」

香澄 「そ、そうだよ……」

香澄の言葉に皆が沈黙した。どうやらこれは噂どころかただ事じゃないようだ。

たえ 「これはただ事じゃないんだね……」

沙綾 「そうだね。ただの噂じゃないよ」

りみ 「それより香澄ちゃん、どうやって帰ったの？」

有咲 「それはそうだな。怖くはなかったのか？」

香澄 「もちろん怖かったよ。あの時はとにかく帰ることしかできなかったから……」

りみ 「良かった……」

香澄 「でも、また会うのか怖いんだよ……」

有咲、たえ、沙綾、りみ 「……」

香澄 「それで気になるんだ……なんで人狼がこの町に居るのかわかって……」

りみ 「そうだね……」

有咲 「とりあえず、お昼時間がもう終わるからできなかつた話しは放課後にしようぜ」

沙綾 「わかった」

たえ 「じゃあ教室に帰るね」

紗夜 「……」

放課後

花咲川女子学院 校門前

有咲 「んで、どうする？これから……」

沙綾 「さあ……とりあえず今日はみんなと一緒に帰った方が良くんじゃない？」

りみ 「そうかな……」

Poppin' Party 「……」

今後どうするかみんなで相談をしても何も良い考えが思い浮かばなかった。

紗夜 Side

3 | A

紗夜 「ふうう……」

放課後の教室、私は一人残って窓の外を眺めながら、昨日あったことを思い出す

【回想】

香澄 『わあ~~~~つ?!』 ダツ

あの時、狼の状態だった私は戸山さんを見かけた。そして戸山さんに飛びかかった。私に怯えて逃げる戸山さんを、私の狼としての本能は彼女を追いかけ襲おうとした。逃げ惑う戸山さんに私の理性が言いたいことはひとつしかなかった

紗夜 『戸山さん、早く逃げて……！このまま戸山さんを襲ったら、私は耐えられないから！』

そして、戸山さんが家に入るのを見て、私の狼としての本能は戸山さんを追いかけるのをやめた。幸いなことに、戸山さんは無事帰ったのだ。

【回想終わり、現在】

紗夜 「まさか戸山さんを襲おうとしたなんて……本当にどうにかなってしまったようだわ……怖い思いをさせてしまったから本当に戸山さんに申し訳が立たない……今の運命が恨めしい……」

?? 「——あの、氷川さん……」

紗夜 「あ、白金さん。」

隣子 「電話が鳴ってるんですけど……」

紗夜 「……そうですね、ありがとうございます」

電話は日菜からだった。

紗夜 「ちよつと失礼しますね。もしもし、日菜？」

隣子 「氷川さん、何があったのかな」

紗夜 「——そう、あなたもだったのね」

日菜 『あたし、怖いよ。もしメンバーたちを襲ってしまえば、あたくし耐えられないかも……』

紗夜 「そうね……私は危うく一人を襲うところだったわ」

日菜 『あたしたち、大丈夫なのかな……』

紗夜 「今はとにかく本能を押さえるしかないわ。厳しいけど」

紗夜 「(そう、これ以上辛い思いをしないためにも……辛い思いはもうたくさんだから)」

日菜 『おねーちゃん?』



紗夜 「あ、そろそろ切るわ。では」

日菜 『うん、じゃあ家でね』

私の押さえられない本能……一体いつになったらそれを押さええる  
ことが出来るのかしら……これから厳しいだろう。

「第一章・遭遇」 二話 戸山香澄の遭遇の真相 終わり

続く……

### 第三話 今井リサと湊友希那の遭遇

紗夜 「白金さん、そろそろ行きましようか」

燐子 「はい、みんな待っていますからね……」

燐子 「(氷川さん、不安そうだな……)」

ライブハウス CIRCLE ロビー

リサ 「あ、来た来た 紗夜〜！燐子〜！」

紗夜 「お待たせしました」

燐子 「あこちゃん、お待たせ……」

友希那 「みんな揃ったわね。じゃあそろそろスタジオに行くわよ」

【10分後】

リサ Side

Bスタジオ

練習の前に、友希那がみんなのセッティングを確認してみる

友希那 「みんな、楽器のセッティングはできた？」

あこ 「バッチリです！」

燐子 「大丈夫です……」

リサ 「いつでも行けるよ♪」

紗夜 「……」

友希那 「紗夜？」

紗夜 「あ、ごめんなさい。問題ありません」

友希那 「わかった、では始めるわ。(紗夜、もしかして何かあったかしら)」

リサ 「(紗夜……)」

友希那 「行くわよ。1、2、3——」

それから練習が一旦終わり——

友希那 「——もうこんな時間ね。ひとまず休憩にしようか」

リサ 「そうだね、休憩しようね！休むのも大事！」

練習後の休憩時間、アタシたちはカフェテリアで注文をしてデザー  
トを待っていた

あこ 「今回のボスどうやって倒せば良いのかな……」

燐子 「そうだよね……今回のボスは以前の時よりキツイよね……」

リサ 「ねえ、友希那。練習終わった後一緒に楽器店行かない？」

友希那 「楽器店？どうして？」

リサ 「実はさ、ベースの弦そろそろ交換しないといけないんで……付き合ってくれる？」

友希那 「そう、帰り道一緒だから付き合うわ」

リサ 「サンキュー、友希那！」

紗夜 「……」

あこ 「紗夜さん、どうしたんですか？」

紗夜 「?何でもないわ」

燐子 「あの、あこちゃん……ちよつと……」

あこ 「あ、うん……」

リサ 「……」

休憩の時、アタシは妙に紗夜が気になった。それに友希那も紗夜に向ける視線が妙に気になる。それから紗夜はアタシたちの視線を感じたのか、ちよつとみんな注文したメニューが出たと聞きそれを取りに行った。

リサ 「ねえ友希那……その紗夜のことを……」

友希那 「リサ、紗夜の話なら練習のあとにしましょう」

リサ 「わ、わかった……」

リサ 「(友希那が紗夜に向けた視線……友希那も気にしてるんだね……)」

それから休憩時間は終わって練習は続いた……

友希那 Side

今日の練習がいつものように終わった。それから紗夜は用事を思い出したと真つ先に家に帰った。私は燐子やあこと別れた後、リサの頼みで一緒に楽器店へ行き、リサのベースの弦を交換した。その帰り道……

リサ 「ねえ友希那、その……」

友希那 「どうしたの、リサ？」

リサ 「今日の紗夜、なんか気にならなかった？」

友希那 「紗夜が？気になってはいたけれど、それが？」

リサ 「なんかね、焦ってると言ったところかな。」

友希那 「焦ってる？」

リサ 「うん、何でだろうね」

友希那 「(焦ってる、か……確か前の練習の時も……)」

【回想、前日】

友希那 『あ、ちょうどみんな片付けたようだね』

リサ 『そうね、じゃあ片付け終わったし、ファミレス行く？』

あこ 『うんうん！ 行こうリサ姉！』

燐子 『それなら私も』

紗夜 『』

リサ 『紗夜は行かないの？』

紗夜 『』

リサ 『紗夜？』

紗夜 『はい？』

リサ 『はい？じゃなくて、ファミレスだよ、ファミレス！ 紗夜は

行かないの？』

紗夜 『あ、そうですか。ごめんなさい、今日は用事があったて 失礼

しますね』

【回想終わり】

友希那 「確かにあの時紗夜は練習が終わった後、何故か空を見上げていたような気がした……一体何故？」

リサ 「ねえ、友希那？友希那ー？」

友希那 「リサ？」

リサ 「どうしたの、ぼーっとしてて」

友希那 「ちよつと考え事よ」

リサ 「考え事ね、やっぱり紗夜のことを気になるじゃん」

友希那 「そ、それは……」

リサの問いに返事を濁すその時だった――

アウウウウー

リサ、友希那 「?!」

リサ 「ねえ、友希那。こ、これって……」

友希那 「リサ、落ち着いて。まずは早く行こう」

リサ 「う、うん……」

友希那 「今はとにかく狼から遠く離れるしかないわ。できるだけ速く……」

とにかく速く走ろうとしたその時だった。後ろからの視線を感じたのは――

友希那 「(……視線? 誰かが私たちを見ているどこから……?)」

リサ 「ねえ、友希那……」

友希那 「リサ、今は喋らないで」

リサ 「で、でもなんだか視線が……」

友希那 「それは知ってるわよ。リサ、だから今は――」  
速く行くわよ、と言おうとした瞬間だった。

『Grrrrrrr…』

リサ、友希那 「!!」

『Grrrrrrrr…』

そう、私たちの目の前に現れたのは『狼』

リサ 「な、何あれ……」

友希那 「あれが噂の『狼』ね」

リサ 「うん……でも、なんか違うような……」

友希那 「(私たちのように普通に立ってる?もしかして――)」  
そう、私たちはこの時初めて気づいたのだ。その『狼』は――

『Grrrrrrrrrahhh!!』

『人狼』だったのだから

リサ 「ゆ、友希那!」

友希那 「リサ、今は速く逃げるわよ!」

リサ 「う、うん!」ダッ

友希那 「(今は速く家まで逃げるしかないわ!)」リサ、速く!  
リサ 「わ、わかってるよ」

友希那 「(でも……でもなんで人狼が……)」  
それから……

友希那 「はあ、はあ、はあ、はあ……」

リサ 「はあ、はあ、はあ、はあ……お、追って来ないの？」

友希那 「お、追って来ないみたいだわ……」

リサ 「さ、さつきまで追われてたようだけど……」

友希那 「(そう……確かにさつきまで人狼に追われてたのに……何故かわからないけれど、家に辿り着いたと見て、追うのを止めたかしら……)」

リサ 「ゆ、友希那……とにかく今は早く家に入ろうね」

友希那 「そう。リサ、今日はもうお休みなさい」

リサ 「う、うん……」

いきなり訪れた人狼との遭遇、そして積もる疑問と共に、今日が終わる……

「第一章：遭遇」 三話 今井リサと湊友希那の遭遇 終わり  
続く……

## 第四話 Poppin, Partyの遭遇

香澄 Side

有咲 「とりあえず、一緒にウチに行こうつか」

沙綾 「そうだね。対策考えないと。それに……」

たえ 「香澄、一人にさせるわけにはいかないしね」

りみ 「私も香澄ちゃんが心配だよ……」

香澄 「みんな、ありがとう……」

有咲 「まあ、それからウチの蔵に集まって対策会議だな。それから考えようじゃねーか」

香澄 「うん……」

一旦みんなで有咲の家に行つて対策会議をすることにした。その時――

美咲 「あ、皆さん帰るんですか？」

有咲 「あ、奥沢さん。どうしてここに？」

沙綾 「はぐみも、どうして？」

美咲 「その……戸山さんが心配で来たんです」

はぐみ 「かーくん大丈夫かなって……」

香澄 「私に？」

美咲 「なんていうか……最近噂があるんでしょう？それに戸山さんが今日元気がないのを見て……」

はぐみ 「それでかーくんのが気になって来たよ。かーくん、大丈夫？」

香澄 「実は昨日ちよつと」

沙綾 「でも、どうやって香澄に？」

香澄 「あの、美咲ちゃん、はぐ、ありがとう……私、元気出すからね」

有咲 「香澄、行こう」

香澄 「うん……」

沙綾 「(香澄、はぐみたちの前でああ言ったけどやっぱり心配だね……)」

りみ 「(香澄ちゃん……)」

昨日見た人狼の恐怖がまだ頭の中から離れない。また会えるのではないか不安が漂う

有咲 Side

市ヶ谷家 蔵

それからみんな蔵に集まった。一応対策会議のために、状況をもう一度まとめる必要があった

沙綾 「有咲、まずは……」

有咲 「まずは状況整理だな……」

たえ 「香澄、もう一度話せる？」

りみ 「香澄ちゃん、大丈夫？」

香澄 「うん、もう一度話すね……」

整理するところなる。

昨日香澄は蔵練が終わったあと、私たちと別れて家に帰る途中だった。その時、狼の鳴き声を聞いた香澄は妹の明日香と電話をして、電話の後に視線を感じたらそこには人狼があったという。それから香澄は人狼に襲われないように必死に逃げてやっと家に着くことが出来たと言った

香澄 「その時は必死だったよ……襲われれば死ぬと思ったから……」

りみ 「香澄ちゃん……」

沙綾 「でも、生きていて良かったよ。香澄が居ないとポピパも無  
いから。ね、有咲？」

有咲 「あ、当たり前だろう！香澄が居ねえと、ポピパは終わったか  
ら……」

たえ 「でもやっぱり気になるね、人狼」

沙綾 「ただの噂どころか夜に危ない事が起きうるからね……」

りみ 「それで香澄ちゃん、他の話しは？」

香澄 「他にする話しはないよ……話して言っても昼間の話を詳しく説明したのが全部だから……」

沙綾 「それにもう話しは聞いたから、次は対策会議だね」



有咲 「対策会議ね……」

正直、今は対策会議つってもみんな良い案が浮かびそうにない。一体どうすれば良いのか……

沙綾 Side

対策会議と言つても結局良い案が浮かばなかった。対策会議は遅々として進まなかったし、挙げ句みんな帰ることにした

りみ 「結局良い考えがなかったね……」

有咲 「それはそうだな……正直今は手が出せねえから」

有咲の家から出ると、もう空に月が浮かんでいた

りみ 「すっかり夜になったね……」

たえ 「きつとみんな心配してるんだね」

香澄 「うん……」

沙綾 「仕方ないね。危険かも知れないけど、帰った方が——」  
帰った方が良いと言ったその時だった。

たえ 「待って」

りみ 「どうしたの、おたえちゃん？」

沙綾 「おたえ？」

たえ 「私たちの他に誰かがいるのかな」

香澄 「どうしたの、おたえ？」

たえ 「それが、誰かが居るような気がして……」

有咲 「誰かが居るって？」

たえ 「誰かが見てるようだけど」

香澄 「ひっ……！人狼!？」

ああ、香澄が驚くのも多分無理はないだろう。なぜならおたえが言った視線と共に、私たち以外の足音が聞こえて来たのだから。そして獣の声も聞こえて……

『Grrrrr…』

沙綾 「(け、獣？一体どこから?)」

そしてそれが近づいてきた。

香澄 「ひっ……!」

『Grrrrrahhhh!!』

そしてそれが私たちの方に飛び付いた！

Poppin, Party 「わあああああああ!?!」

沙綾 「い、今は逃げよう!」

有咲 「わ、分かってるよ!」

沙綾 「(本当に人狼だなんて…い、今は速く…!!)」

私たちの今夜は恐ろしい遭遇の夜だった。この日は一生忘れられないだろう。人狼を見てみんなが驚き、有咲の蔵へ逃げるばかりだった。

しかしやつと逃げたものの、特に昨日に続いて今日も人狼と遭遇した香澄は恐怖で何の声も出なかった。そして私たちは思ってしまう。『なんでこの町に人狼が居るのか』と。結局私たちはみんな自分の家に連絡して有咲の家に泊まると言って、有咲の家で一晩を過ごした…

香澄 Side

結局不安な予感が的中しちゃった…しかも、みんなで人狼と出会ってしまった。これからどうなっていくのか…

未だ収まらない人狼への恐怖や積もる疑問と共に、Poppin, Partyの恐ろしい遭遇の一日が終わっていく。

人狼姉妹の物語 「第一章・遭遇」 四話 Poppin, Partyの遭遇 終わり

続く…

## 第五話 遭遇の真相

【日曜日】

リサ 「おはよう、友希那」

友希那 「リサ、あまり眠れなかったのね……」

リサ 「うん……友希那は……」

友希那 「私もね……」

リサ 「はあ……」

友希那 「……私はスタジオに行くね」

リサ 「うん……じゃアタシはバイト」

友希那 「話なら……」

リサ 「うん……帰ってからしようね」

リサと友希那は昨日の遭遇からかなり疲れている様子だった。今日は日曜日で、学校が休み。リサはバイトへ、友希那は個人練習でそれぞれの日常を始める

香澄 「おはよう、みんな……」

たえ 「……」

沙綾 「……」

有咲 「……」

たえ 「もう朝になったね」

りみ 「うん……」

沙綾 「みんな結構疲れたね……」

香澄 「……」

ポピパのみんなは昨日の遭遇以降、有咲の蔵で一晩を過ごした。そして朝になってポピパのみんなは昨日の恐怖がまだ頭に残っててずっと疲れたままだった。

沙綾 「……とりあえずみんな家に帰ろうか。今は人狼出ないから……」

有咲 「うん、じゃあ家に帰ったら……」

香澄 「うん、電話するね……」

今日は休日、ポピパのみんなは準備を終えてそれぞれ家に帰る。二

回も人狼と遭遇した香澄は妹の明日香が迎えに来て家に帰った。

紗夜 Side

氷川家

紗夜 「はあ……一昨日に続いて昨日も、か……」

日菜 「おねーちゃん……もしかして昨日も？」

紗夜 「そう、昨日もね……日菜は？」

日菜 「あたしも……おねーちゃん、実は昨日リサちーと友希那ちゃんを見かけてたんだ。人狼の状態で……」

紗夜 「?!今井さんと湊さんを?!」

日菜 「うん……」

【日菜の回想】

日菜 『Grrrrrrrrrahhh!!』

日菜は昨日、家に帰る今井さんと湊さんを見かけた。それから、彼女たちを襲おうと飛びついたと言った。日菜の理性がそれを拒んでるのにも関わらず……

リサ 『ゆ、友希那!』

友希那 『リサ、今は速く逃げるわよ!』

リサ 『う、うん!』ダッ

【回想終わり】

紗夜 「そうだったのね……湊さんと今井さんに本当に申し訳ないわね」

日菜 「あたしも……おねーちゃんは昨日どうだった？」

紗夜 「私は……」

日菜の話聞いて私も昨日のことを日菜に話した。日菜は私の話を聞いて……

日菜 「ポピパのみんな大丈夫かな」

紗夜 「Poppin' Partyの皆さんもそうだけど、一番心配されるのは戸山さんよ」

日菜 「香澄ちゃん?どうして?」

紗夜 「戸山さんにとっては、狼の私を見るのが昨日で二回目だったから……」

日菜 「それじゃ、おねーちゃんが昨日言ってた襲うところだったのって香澄ちゃんだったの？」

紗夜 「そう、あの時戸山さんを見て襲おうとしたからね……それに昨日は戸山さんだけでなく、Poppin' Partyの皆さんを……」

日菜 「おねーちゃん……」

紗夜 「……」

日菜 「……あたしたち、大丈夫かな」

紗夜 「……話しは後にしてそろそろいきましよう」

日菜 「うん……ところでおねーちゃん」

紗夜 「どうしたの？」

日菜 「あたしね、月が気になってきたよ」

紗夜 「月、ねえ……日菜のその言葉だと、そろそろその時が近いかも知れないわね」

日菜 「そうだね、この話をしたらもうそんな時かって思っちゃうんだよね」

紗夜 「……そろそろ出るとしましょう。私は練習に行くわ」

日菜 「うん、じゃああたしはパスパレの練習ね。行ってくるね！」

紗夜 「気をつけてね、日菜。ふう……」

日菜の言った月が気になってきたという言葉。私も空を見れば、自然と月が気にかかる。それは月の満ち欠けが私たち人狼にとってどれ程影響を及ぼすかと関係してるから……

日菜 Side

芸能事務所 レッスンスタジオ

日菜 「はあ……」

麻弥 「日菜さん、どうしたんですか？落ち込んで……」

日菜 「あ、麻弥ちゃん、千聖ちゃん……」

千聖 「落ち込んでるなんて、日菜ちゃんらしくないわよ？」

日菜 「まあね、最近噂のことで色々」

麻弥 「まあ、最近、狼騒ぎのせいでみんな毎日騒がしいですからね」

千聖 「私もその噂で帰る時は心配だわ。日菜ちゃんは大丈夫？」

日菜 「あ、あたしは大丈夫だよ。夜はちゃんと帰るから。」

千聖 「それはよかったけど、夜は気をつけるのよ」

日菜 「わかったよ、千聖ちゃん。心配してくれてありがとう」

麻弥 「それよりみんな夜は大丈夫ですかね？自分ちよつと心配です」

千聖 「その心配は後にしましょう。そろそろ時間だから練習再開しようね」

日菜 「うん」

千聖ちゃんの問いかけに『ちゃんと帰るから』なんて答えただけど……今はまだあたしが人狼だなんてみんなに言えない。それに人狼になる姿や、人間へ戻る姿もみんなに見られたくない。その時が来ちゃったら、みんなあたしを恐れて避けるかも知れないから……

紗夜 Side

人狼…昼は人だったが、夜は狼になる…そして狼になったら人間の理性など狼の本能に飲み込まれてしまう。現に日菜は昨日今井さんと湊さんを襲おうとして、私はPoppin' Partyの皆さんを襲おうとしたから。今井さんと湊さん、それにPoppin' Partyの皆さんには本当ひどい迷惑をかけてしまった

個人練習の後の休憩時間で以前日菜とした会話を振り返ってみる。この会話は幼い頃親から聞いて、それから日菜と私がそれぞれバンドに入った後の時にした会話だった

紗夜 『月は私たち人狼と一番大きく関係している。何故か知ってる？』

日菜 『月の満ち欠け？』

紗夜 『そう、月の満ち欠けは私たち人狼に影響を及ぼす。月が満ちれば満ちるほど、人狼の力はより強大になる。ここまでは知ってるんでしょ？』

日菜 『うん、それは知ってるよ。それに満月の話しもね』

紗夜 『話が早いね。そう、満月は人狼の力が一番強い日よ。だから、満月は特に気をつけなさい。満月は何が起きるか分からないか

ら』

日菜 『わかったよ、おねーちゃん』

それに今日した日菜との会話も……

日菜 『月が気になってきたよ』

紗夜 『月、ねえ……そろそろその時かも知れないわね』

日菜 『そうだね、この話をしたらもうそんな時かって思っちゃうんだよね』

日菜との話通り人狼と月の満ち欠けの関係は決して切り離せない。月が満ちれば満ちるほど、あたしたち人狼は益々強くなるから……そして満月になれば……満月の日は今この瞬間にも刻々と近づいてくる。

人狼姉妹の物語 「第一章： 遭遇」 五話 遭遇の真相 終わり  
続く……

## 第六話 白鷺千聖と丸山彩の遭遇

【日曜日】

千聖 Side

芸能事務所 レッスンスタジオ

今日は練習の日、練習の真つ最中に日菜ちゃんが珍しく落ち込んでるのが見えて休憩の時に日菜ちゃんに話をかけた

日菜 「はあ……」

麻弥 「日菜さん、どうしたんですか？落ち込んで……」

日菜 「あ、麻弥ちゃん、千聖ちゃん……」

千聖 「落ち込んでるなんて、日菜ちゃんらしくないよ？」

日菜 「まあね、最近噂のことで色々」

麻弥 「まあ、最近、狼騒ぎのせいでみんな毎日騒がしいんですからね」

千聖 「私もその噂で帰る時は心配だわ。日菜ちゃんは大丈夫？」

日菜 「あ、あたしは大丈夫よ。夜はちゃんと帰るから。」

千聖 「それはよかったけど、夜は気をつけるのよ」

日菜 「わかったよ、千聖ちゃん。心配してくれてありがとう」

麻弥 「それよりみんな夜には大丈夫ですか。自分ちよつと心配です」

千聖 「その心配は後にしましょう。そろそろ時間だから練習再開しようね」

日菜 「うん」

それから練習は続いた。日菜ちゃんは練習の間になんか顔が曇っていた。何があったのかも分からないまま練習が終わって、日菜ちゃんはすぐに帰った。そして日菜ちゃんを除いて四人でつぐみちゃんのカフェで反省会をすることにした。

羽沢珈琲店

イヴ 「今日の練習も楽勝でしたね！」

千聖 「確かにね、これからもみんな頑張ろうね」

彩 「日菜ちゃんは最近何かあったのかな？ずっと早く帰るみたい



で……」

麻弥 「日菜さんにも何か事情があるのでしようね。ジブンも最近の日菜さんが気になりますけど」

千聖 「あとで日菜ちゃんに話を聞きましたようね。最近狼の噂もあるけれど、練習の後はちゃんと帰るって言ったから」

イヴ 「最近、本当に大丈夫でしょうか？気になりますね」

彩 「うん、最近帰るのちよつと不安だからね」

イヴ 「そういえば、最近カスミさんがなんだかずっと落ち込んでますね」

香澄ちゃんか？何があつたのかな？

彩 「香澄ちゃんが？どうして？」

イヴ 「それがよく分かりませんので……」

千聖 「まあ、明日本人から聞くしかないわね。」

彩 「とにかくみんな今日もお疲れ様、明日は学校で頑張りましたうね」

イヴ、麻弥 「はい！」

千聖 「それじゃ、イヴちゃんは明日学校で見てね」

イヴ 「はい！」

彩 「じゃ、反省会はおしまい！またね！」

日菜 Side

練習が終わった後、あたしは早速家へ走る。日が完全に沈む前にかく走る。日が完全に沈むとその後は狼の時間だ。

日菜 「(千聖ちゃんに『ちゃんと帰るから』なんて……でも、言えないんだよね……みんなのまえで……あたしは実は人狼だなんて……パスパレだけじゃないよ……ガルパのみんなにも言えないから……)」

考えているうちに家まで到着した。変化の前に間に合ってよかった。おねーちゃん待たせてはいけないから早く入ろう。

氷川家

日菜 「ただいま！」

紗夜 「お帰り、日菜」

日菜 「おねーちゃんは大丈夫だった?」

紗夜 「私は今日は弓道部の練習もバンドの練習もなかったから、大丈夫だったわ」

日菜 「そっか。ねー、おねーちゃん、そろそろ……」

紗夜 「うん、そろそろ時間ね。日菜?」

日菜 「うん。分かってるよ」

紗夜 「そう。では——」

——そう、また今日も変化の時が訪れた。人間から狼へ——  
アウウウウウー——

彩 Side

つぐみちゃんのカフェで反省会を終えた後、イヴちゃんと麻弥ちゃんと別れて千聖ちゃんと帰る途中だった

千聖 「彩ちゃん、今日は大丈夫なの?」

彩 「何が?」

千聖 「狼よ、彩ちゃんは大丈夫?」

彩 「狼はやっぱり不安だよ、襲つて来ないか……千聖ちゃんは?」

千聖 「私も不安よ。誰だつて狼が怖くない人は居ないわ」

彩 「だよね……ところで千聖ちゃん」

千聖 「何?」

彩 「日菜ちゃんは大丈夫かな?」

千聖 「日菜ちゃんね……日菜ちゃんは大丈夫でしょう。私が問いかけた時日菜ちゃんは『ちゃんと帰るから』って答えたから」

彩 「そ、そうだよ。日菜ちゃんは大丈夫だよ(日菜ちゃん……)」

千聖 「彩ちゃん、今は心配しないで。」

彩 「う、うん……」

彩 「(もう日が沈んだね……確か夜になると狼が……)」  
その時だった

アウウウウウー——

彩 「え?!」ピタッ

千聖 「彩ちゃん?どうしたの?」

彩 「ち、千聖ちゃんは聞いた？」

千聖 「聞いたって…鳴き声？」

彩 「そ、そうだよ…鳴き声が」

千聖 「ええ、私にも聞こえたわ。今は速く行きましょう、彩ちゃん」

彩 「うん…」

ただずつと歩く。なんとしても狼から遠ざけないと――

ーダッ

千聖 Side

千聖 「――っ、だ、誰!」ビツク

彩 「ど、どうしたの?千聖ちゃん?」

千聖 「い、今足音がしたみたいで」

彩 「足音?誰だろう?」

千聖 「彩ちゃん、気になるのは分かるけど、今は速く――」

速く行くこうとした瞬間だった。後ろの視線を感じたのは――

千聖 「――?!」ガタッ

視線を感じて振り向くと――

千聖 「――え」

彩 「千聖ちゃん?」

千聖 「あ、あああ…」

彩 「千聖ちゃん、急に固まっちゃって――」

千聖 「ふ、振り向かないで!」

彩 「ち、千聖ちゃん?どうしたの急に――」

千聖 「(ああ、彩ちゃん振り向いたら――)」

彩 「なにが――え」

『Grrrrrr』

彩 「……………」

千聖 「……………」

彩、千聖 「……………きゃああああああ!!」

『Grrrrrrrahhh!!!』

そう、振り向いたら確かに私たちの噂の狼が居た。ただの狼じゃな

彩 「ち、千聖ちゃん、あ、あれって」

千聖 「あ、彩ちゃん、今は考えないで速く走るのよ!」

彩 「わ、分かってるよ!」

千聖 「(た、確かに狼だと聞いたけど、あんな狼が居たなんて。これはただの狼じゃなくて——)」

彩 「で、でも、人狼だなんてありえないよ!」

確かに彩ちゃんの言う通り、これはありえないこと。ただの狼どころか人狼と遭遇してしまうなんて、いくらなんでもこれはありえないことだ。

彩 「ち、千聖ちゃん!」

千聖 「今度は何?!」

彩 「もうすぐ家につくから今夜は私の家に泊まって!」

千聖 「え?!彩ちゃんは大丈夫なの?!」

彩 「大丈夫だよ!事情は後で話すから!」

千聖 「分かったわ!彩ちゃん、今は速く!」

丸山家 前

彩 「はあ、はあ、はあ、はあ……」

千聖 「や、やつと、ついたね……」

彩 「う、うん……人狼は追ってこないみたい……」

荒い息を吐きながらようやく彩ちゃんの家についた。まったくありえない事に未だ頭の中が複雑、人狼は私たちが家についたと見て追って来なかった。

彩 「事情話してくるね、千聖ちゃんはここで待っててね」

千聖 「う、うん……はあ、はあ……」

やつとついた彩ちゃんの家、彩ちゃんが事情を話したら快く許可を得たので今夜は彩ちゃんの家で泊まることとなった。恐怖と疑問が渦巻く中、私たちの日曜日の夜が終わる……

人狼姉妹の物語 「第一章…遭遇」 六話 白鷺千聖と丸山彩の遭

遇 終わり

続く……

## 第七話 美竹蘭と青葉モカの遭遇

蘭 Side

練習の休憩時間、みんなでライブハウスのカフェで学校の事を話していた。

蘭 「最近学校がもつと騒がしくなったね」

ひまり 「そうだよ。やつぱり最近の噂が多いんだよね」

モカ 「噂でみんな大変ですからな」

つぐみ 「そうだよ、モカちゃん。最近狼を見たと言う生徒が多いからな」

ひまり 「夜道大丈夫かな。夜道は暗くて危ないから…」

巴 「しかも夜に彷徨く人もいるからもつと気をつけないな」

蘭 「生徒会では何か苦情とか来てないの？」

つぐみ 「それがね、生徒会にも狼関係の苦情は来るけど、狼関係の苦情はみんな難色があつてね…」

ひまり 「難色ね…何かいい方法はないかな…」

巴 「今はみんな夜になる前にちゃんと気をつけて帰る方法しかないな。アタシも日課終わったらなるべく早く帰ろうと思ってるからさ」

蘭 「そういえば、あこはちゃんと帰るの？」

巴 「あこはちゃんと帰るんだ。燐子さんも一緒に帰るから大丈夫だろう」

モカ 「おおー、それは良かったですな」。

つぐみ 「モカちゃんやひまりちゃんも夜には気をつけて。夜に何が起こるかわからないから」

ひまり 「夜はあぶないことだらけだからね。みんな気をしっかり引き締めていけばきつと大丈夫だよ」

モカ 「夜は気をつけましょうね」

ひまり 「さて、そろそろ休憩時間も終わったところで、練習再開しましょうね」

モカ 「ますますツグリましょう」

その後、練習が再開された。

蘭 「(次のライブが近いのもつと練習しないと…)」

最近は何が夜に出るといふ噂でみんな不安がっている。それでもんなお昼に集まって狼の噂について相談することになった。つぐみは狼の噂について生徒たちの色んな話を聞き、生徒会へ報告するといふ。

つぐみの話だと対策を講じてはいるけど、こう言った対策が簡単に取れないと言った。生徒たちは夜になる前に帰るべきだと言うだけ。家でもなるべく早く帰るようにと言われる。みんな大丈夫だと言うけど、みんな心配だ。ひまりや巴やモカはバイト、つぐみは生徒会の仕事があるから…

ひまり 「蘭? 蘭?」

つぐみ 「蘭ちゃん、蘭ちゃん?」

蘭 「……? あ、ゴメン」

巴 「なんかブーツとしてたな」

蘭 「あたしが?」

モカ 「まるで像みたいだったなー、ブーツとしててー。らしくないよー」

蘭 「もう、モカ…」

つぐみ 「ま、まあまあ。そろそろ時間終わっちゃうから」

ひまり 「じゃあ、そろそろ練習終えようね! 今日みんなでファミレス行こう!」

蘭 「全く、ひまりったら…」

つぐみ 「あ、あははは……」

もうすぐスタジオの時間切れだったので今日の練習を終えた。それからひまりの提案でみんなでファミレスに行くこととなった

モカ Side

ひーちゃんの提案で行ったファミレス、みんなの話が続く中――

ひまり 「今日は皆で帰らない? 今日はバイトも無いから、みんなで帰るのはどうかなと思ってさー!」

つぐみ 「うん! 一緒に帰ろ、ひまりちゃん!」

モカ 「おおーそれは良いですなー。みんなで一緒に帰れば大丈夫だしー」

蘭 「まあ、あたしもいいけど」

巴 「それが良いな。それじゃ、食い終わったらみんな帰ろうー！  
みんなでファミレスで時間を過ごしたら、もう日が暮れて夕方だった。ひーちゃんの提案でみんなで帰るということになったけど…

つぐみ 「やっぱり不安だね…」

蘭 「確かに夜はちよつと…」

モカ 「まあー、狼に遭わなければ大丈夫だよー」

ひまり 「うっ…ますます不安だよ…」

蘭 「明日は月曜日だっけ？明日の日程はどうなの？」

ひまり 「明日は私や巴はバイト無いよ。モカはどう？」

モカ 「あたしー？あたしは学校終わったらのんびり予定ー」

つぐみ 「明日バイトないんだね…私も明日は学校の後何も無いけ

ど…あ、そろそろ私は家に着くね。それじゃ、次は明日にね！」

蘭 「おつかれ、つぐみ」

ひまり 「つぐ、お疲れ！それじゃ、明日ね！」

つぐはそのまま珈琲店に着いて帰った。そのままひーちゃんとトモちんとも別れて、帰り道は蘭と一緒にだった。

蘭 「日が沈んだね」

モカ 「もう夜になりますなー。蘭は狼とか大丈夫？」

蘭 「モカ、うるさい」

モカ 「えー、蘭怖くないの？」

蘭 「ほら、早く来て。後に」

モカ 「りようかい〜。蘭は狼怖くないんだね〜」

蘭 「もう、モカったら…もう空暗いから早く行こう」

アウウウウウー

蘭 「——？」

モカ 「蘭、どうしたのー？」

蘭 「狼が出たな。モカ、速く来てよ」

モカ 「はーい、分かってまーす」

それから何歩歩いただろうか…蘭はなんだか焦っていた

モカ 「蘭、大丈夫ー？」

蘭 「モカ、今は話しかけないで」

モカ 「蘭は後ろ大丈夫ー？」

蘭 「分かってるよ！誰かが後ろにいるってことぐらい！」

確かに、あたしたちの後ろに誰かがいるのは蘭も感じているけど、  
敢えて言わないようだ。それから何歩か歩いて交差点に着いたところ…

蘭 「はあ…誰かは知らないけど、いい加減姿見せたら？」

モカ 「蘭？」

蘭 「もう出たら？」

蘭の言葉を聞いたのか、あたしたちの後ろの『何か』が足を止めた。

『……………』

蘭 「はあ……で、いったい誰？ひまりや巴やつぐみじゃないし

———」

蘭は後ろの『何か』に振り向く

蘭 「いったい———っ!？」

モカ 「蘭、どうしたの？（蘭が……怯えてる？）」

蘭 「も、モカ、お、狼が…」

モカ 「え!？」

『Grrrrrrrrrr……………』

蘭 「モカ、今は振り向かないで速く走って…！速く！」

モカ 「…っ!？」

蘭 Side

この世にあり得ないことがあるとすればあたしたちの後を追いか  
けた『何か』なんだろう。確かに狼が出るという噂だけど、今考える  
ところの噂はただの噂じゃない。

蘭 「モカ、今は振り向かないで速く走って…！速く！」

モカ 「…っ!？」ガシッ

『Grrrrrrrahhhh!!!』

ダッ



蘭 「モカ!？」

モカ 「蘭、蘭も走って！」

蘭 「うん、でもこれはあり得ないよ！」

確かにあり得ない。ただの狼だと思ったら、まさか人狼だなんて、思いもしなかったのに……そうやってあたしたちは走って走って家まで走った……なんとか家に着いて人狼を振り切り、それからモカと別れたんだけど、今夜は多分良く眠れそうにない。

予想外の出来事とともに、日曜日の夜が終わっていく……

人狼姉妹の物語 「第一章：遭遇」 七話 美竹蘭と青葉モカの遭

遇 終わり

続く……

## 第八話 日曜日の真相

彩 Side

彩の部屋

千聖ちゃんと見た人狼、その人狼から逃げて漸く家についた後、事情を話して千聖ちゃんと一緒に寝ることとなった

彩 「千聖ちゃん、私…」

千聖 「大丈夫よ、怖かったのは私も同じだったから」

彩 「千聖ちゃん……」

千聖 「彩ちゃん、今は何も考えないで寝ましようね。人狼のことはとりあえず明日に考えましようね」

彩 「うん。それじゃ千聖ちゃん、そろそろ電気消すね？」

千聖 「ええ。お休み、彩ちゃん」

彩 「お休み、千聖ちゃん」

夜は結局私も不安のせいかちゃんと眠れなかった。本当に怖かった夜が終わった。

チュンチュン チュンチュン

「——彩ちゃん」

彩 「ん……」

「彩ちゃん、そろそろ朝だよ」

彩 「ちさと、ちゃん？」

千聖 「正解。さあ、彩ちゃん。早く起きて」

彩 「うん…」

眩しい朝日と千聖ちゃんの声に目が覚めた。やっぱり昨日の出来事のせいか、鏡に映った私の顔は疲れたように見えた。それに支度をしている千聖ちゃんもちゃんと眠れなかったのが見えた。やっぱり千聖ちゃんも怖かったんだね。

千聖 「——じゃあ、そろそろ行きましようか」

彩 「うん」

準備を整え、私たちは学校へ急ぐ。人狼と遭遇する前とは違って、不安と恐怖が重なる新たな日曜日の日常が始まった

蘭 Side

昨日の夜、結局よく眠れなかった。あたしの脳裏には未だ昨日目撃した人狼が鮮烈に残っていた。

蘭 「はあ…（今考えても仕方ないか…）」

朝食をする間、父さんに『なるべく夜になる前に帰りなさい』と言われた。最近の噂のことがあるのか、父さんは心配そうな顔つきだった。

朝食を終えて出たら、疲れた顔つきのモカがいた。どうもモカも良く眠れなかったようだ。

蘭 「おはよう、モカ」

モカ 「おはようー、蘭」

蘭 「モカ、昨日ちゃんと眠れなかったの？」

モカ 「当たり前だねー、そういう蘭も昨日よく眠れなかったみたいだしー」

蘭 「まあ、あたしもそうだった…とにかくみんな待っているから早く行こうか」

モカ 「行こうー、みんな待ってるからねー」

あたしたちはまた新たな月曜日の日常を始めた。昨日人狼と遭遇する前までとは違う日常を――

千聖 Side

花咲川女子学園

次の日、反省会でイヴちゃんの話が気になって香澄ちゃんのクラスである2-A教室へやって来た。もちろん彩ちゃんと一緒に香澄ちゃんの話の話を聞きに…

有咲 「あれ？白鷺先輩と彩先輩？ここにはどうしたんですか？」

千聖 「あ、有咲ちゃん。香澄ちゃんはいるの？」

有咲 「香澄ですか。来てはいますけど、今は香澄上手く話ができないかもしれませんね」

彩 「どうして？」

有咲 「実は香澄土曜日からショックなんで…」

彩 「ショック？」

有咲 「はい、それで今は香澄あんまり大丈夫じゃ…」

千聖 「分かったわ、じゃあ話せる状態になったら、いつでも話かけてね」

有咲 「あ、はい。ありがとうございます」

千聖 「香澄ちゃんが土曜日からシヨック状態か…」

彩 「なんか気になるね」

「千聖ちゃん、彩ちゃん」

千聖 「花音、どうしたの？」

花音 「そろそろ朝会始めるから速く教室へ来て」

千聖 「わかったわ。もう授業だから教室に入るね。じゃあ彩ちゃん、お昼に教室へ来てね」

彩 「うん、お昼に来るね」

私は彩ちゃんと別れて花音と一緒に教室へ入った。

ひまり Side

羽丘女子学園 2-A

月曜日の朝、蘭とモカがなんだか疲れたみたいだった

つぐみ 「蘭ちゃん、モカちゃん、疲れてるみたいだけど大丈夫？何かあった？」

ひまり 「ふたりとも、昨日何かあったの？昨日練習終わってからちゃんと帰れたんじゃないの？」

蘭 「ああ…それが…いや、後で話すね。今はあたしもモカも疲れてるから…」

巴 「今は蘭とモカ、そつとしておくのがいいかも知れないね。なんだか疲れてるんだから」

つぐみ 「う、うん…」

ひまり 「でも…昨日みんなちゃんと帰ったはずなのに、蘭とモカに何があったのかも気になるよ…」

つぐみ 「それはそうだよ、昨日のことも気になるから」

巴 「なら、二人が落ち着くまで待ってしよう」

つぐみ 「うん、そうしようね」

ひまり 「あの、蘭、落ち着いたら何があったか聞いても良いよね」

？」

蘭 「あ、ああ、落ち着いたら話すね…今は疲れてるから…」  
つぐみ 「あの、モカちゃ…」

モカ 「ごめんねー、つぐ。今は疲れちゃったんで、モカちゃんはこちらよと落ち着いたら話しますねー」

そう言いながら蘭とモカはうつ伏せた。昨日、二人に何があったのかを聞くのは今じゃない。私たちは二人が落ち着くまで待つことにした。

紗夜 Side

一時間目が始まる前の時間、窓の外を眺める。昨日と何も変わらない青空

【紗夜の回想】

昨日、私と日菜にまた夜が訪れた。昨夜の月はもはや満月に近いとも言える月だった。あと2日や3日が過ぎれば満月とも言えた。狼へ変化した私はその夜――

蘭 『モカ、今は振り向かないで速く走って…！速く！』

モカ 『…っ！』ガシッ

紗夜 『Grrrrrahhhh!!!』

蘭 『モカ!?!』

モカ 『蘭、蘭も走って!』

美竹さんと青葉さんに襲いかかった。私は私自身を恐れて必死に逃げる美竹さんたちを追いかけた。その夜は満月が近かったので、私の狼としての力が強くなった日だった。必死に逃げる二人の恐怖に狼の本能は強くなった。そして美竹さんたちが家に入った瞬間、私は二人の追撃を止めた。

【回想終わり】

紗夜 「あの二人は大丈夫かしら…戸山さんやPoppin, Partyの方も心配ね…」

日菜 Side

一時間目が始まる前の時間、窓の外を眺める。青空は今日も何も変わらないままだ。でも、あたしの心は不安のまま。

【日菜の回想】

昨日、パスパレの練習が終わった後、家へ帰ったあたしはおねーちゃんど夜を迎えた。満月に近い月。もう絶望の日が近づいたのを感じる。

狼へ変化したあたしはその夜に――

彩、千聖 『きやああああああ!!』

日菜 『Grrrrrrrrrahhh!!!』

彩 『ち、千聖ちゃん、あ、あれって』

千聖 『あ、彩ちゃん、今は考えないで速く走るのよ!』

彩 『わ、分かってるよ!』

思いもしなかった。まさか同じパスパレの彩ちゃんと、千聖ちゃんを襲うなんて…昨日は満月が近かったのであたしの力は一昨日より強かった。彩ちゃんと千聖ちゃんはそんなあたしから必死に逃げた。それから彩ちゃんと千聖ちゃんは彩ちゃんの家へ走った。

【回想終わり】

日菜 「はあ……」

一昨日はリサちゃんど友希那ちゃん、昨日は彩ちゃんと千聖ちゃんに怖い思いをさせてしまった。

日菜 「(あの二人は大丈夫かな…後で二人見に行こうか…)」

一週間の始めである月曜日、しかし人狼と遭遇した人たちには昨日までとは全く違う月曜日が始まった。

人狼姉妹の物語 「第一章…遭遇」 八話 日曜日の真相 終わり

続く…

## 第九話 遭遇した者たちの話 (一)

有咲 Side

<花咲川女子学園 2—A>

香澄は未だ落ち込んでいた。人狼と二回も遭遇したから無理もないけど、隣で香澄を見ている私も事実香澄が人狼と二回目で遭遇したその日に人狼と遇っちゃったから。もちろん、私だけじゃなくポピパのみんなが人狼と遇っちゃった。人狼と遭遇してから、私はもちろんみんなも不安と恐怖を感じてしまった。また遭遇するのではないかという不安感と人狼への恐怖を。

とにかく朝会を前にしたその時――

「香澄ちゃん?」

香澄を呼ぶ声が出て振り返ると

有咲 「あれ?白鷺先輩と彩先輩?ここにはどうしたんですか?」

白鷺先輩と彩先輩が教室へ来ていた。

有咲 「(いったいどうして……)」

千聖 「あ、有咲ちゃん。香澄ちゃんはいるの?」

有咲 「(香澄に?) 香澄ですか?来てはいますけど」

私は白鷺先輩の問いかけに香澄の方を振り向いて再び話す。

有咲 「今は香澄上手く話ができませんね」

彩 「どうして?」

有咲 「実は香澄土曜日からショックなんで……」

彩 「ショック?」

有咲 「はい、それで今は香澄あんまり大丈夫じゃ……」

白鷺先輩は彩先輩と顔を見合わせると

千聖 「分かったわ、じゃあ話せる状態になったら、いつでも話しかけてね」

有咲 「あ、はい。ありがとうございます」

教室へ戻る白鷺先輩と彩先輩、その二人がなんで香澄を探しているのか?今はまだわからないまま香澄の方へ行った。

有咲 「なあ、香澄」

香澄 「…何？」

有咲 「さつき、白鷺先輩と彩先輩が香澄のこと、探してたぞ」

香澄 「彩先輩達が？どうして？」

有咲 「さあ、何か香澄に聞きたいことがあったのかも知れねーしな。私が無か話したら話せる状態になったら話しかけてって言われたから。」

香澄 「……………」

香澄は私の話を聞いたら黙ったままだった。

有咲 「それにしても……（白鷺先輩たちも何かあったのかな？…）」

二人がなんで香澄に話を聞きに来たのか？その理由はお昼に白鷺先輩に話しかければ分かるかも知れない。そう考えてるうちに一時間目が始まった。

沙綾 Side

一時間目が終わった後、休み時間に有咲が私たちの教室へ訪れた。

沙綾 「あれ、有咲、ここにはどうしたの？」

りみ 「有咲ちゃん？」

有咲 「ああ、お前たちお昼に白鷺先輩に会いに行かねえか？」

沙綾 「千聖先輩に？何かあった？」

有咲 「それがちよつと気になって。白鷺先輩たち、なんかあるみたいだな」

りみ 「千聖先輩に聞けば分かるんじゃないかな。おたえちゃんにも話すの？」

有咲 「おたえにも白鷺先輩たちのこと話すかと思つてき…なんか白鷺先輩たちの顔、土曜日の夜の私たちみたいで…」

沙綾 「土曜日の私たちみたい、か……ねえ、有咲」

有咲 「なんだ？」

沙綾 「私たちも付き合つて良い？」

有咲 「沙綾も？どうして？」

沙綾 「ちよつと気になって……」

有咲 「まあ、良いよ。後で白鷺先輩に話すね。」



沙綾 「うん。それと有咲、香澄は…」

有咲 「分かった。こつちで落ち着かせるからな」

りみ 「有咲ちゃん、お願いね」

有咲は頷いた後、教室へ帰った。

沙綾 「今は香澄が落ち着くのを待つしかない」

そしてもうひとつ気になる事。千聖先輩に何があったのか？それも気になってきた。

千聖 Side

二時間目が終わった後、有咲ちゃんが教室へ訪れた。

有咲 「あの、白鷺先輩。ちよつと話が…」

千聖 「あら、有咲ちゃん、話つて？」

有咲 「あの、お昼時間にポピパのみんなで白鷺さんに話を聞きたくて…」

千聖 「ポピパのみんなで？」

有咲 「それで、白鷺先輩は構わないんですか？ポピパのみんなでも…」

ポピパの皆で？もしかして、香澄ちゃん以外のメンバーたちも何かあったのかしら？…有咲ちゃんの話が聞きたい。

千聖 「…ええ、構わないわ。もし話したいことがあれば、聞くわね。」

有咲 「はい、ありがとうございます。あ、それと…」

千聖 「？また何かあるの？」

有咲 「香澄も…その、連れて来ますね。落ち着かせてですね…」

千聖 「ええ、待ってるわね。中庭で会いましょう」

有咲 「はい。じゃあ……」

有咲ちゃんはあいさつをして教室へ戻った。

千聖 「もしかして…ポピパにも何か…」

それから三時間目が終わった後、私は彩ちゃんにポピパのみんなとお昼時間に落ち合う予定と中庭でポピパのみんなに話を聞く予定を伝えた。彩ちゃんは頷いて教室へ戻った。

「Chapter:有咲 Side」

お昼時間に白鷺先輩と会う予定を取った。私はこの事を他の三人に伝えて、それから香澄をなんとか落ち着かせることにした。どうも厳しいかも知れないけど今はなんとかやるしかないだろう…

彩 Side

昼間のランチタイム、千聖ちゃんが教室へやって来た。

千聖 「彩ちゃん」

彩 「千聖ちゃん」

千聖 「中庭へ行く」

彩 「うん、分かった。ポピパのみんなの話を聞くんではない？」

ポピパのみんなは一体どんな話を聞かせてくれるのか？まずは千聖ちゃんと一緒に中庭へ向かうことにした。

花咲川女子学園 中庭

中庭にはポピパのみんなが待っていた。

有咲 「———待ってました」

彩 「有咲ちゃん…」

沙綾 「その…私たち、千聖先輩たちがどうして今日有咲のところへ来たのか気になりました…」

千聖 「そう。実は…」

千聖ちゃんはイヴちゃんが最近香澄ちゃんが落ち込んでいるのを心配していることから話した

沙綾 「そうですか、イヴが香澄を…」

彩 「それで、香澄ちゃん何かあったか気になって…」

香澄 「……………」

千聖 「香澄ちゃん、話しづらいのなら今話さなくても大丈夫よ。

あえて今日じゃなくても———」

香澄 「あ、あの」

千聖 「？」

香澄 「は、話します！」

彩 「か、香澄ちゃん…」

りみ 「香澄ちゃん、大丈夫？」

香澄 「私は大丈夫よ。いつまでも落ち込んでるのはいけないか

ら」

千聖 「香澄ちゃん……」

香澄 「実は……私、人狼と……」

千聖 「え？」

彩 「人狼？」

驚いた。香澄ちゃんがまさか人狼と……

沙綾 「実は香澄だけじゃありません」

千聖 「香澄ちゃんだけじゃないって、どういうこと？」

たえ 「実は私たちも……」

ポピパのみんなはじっくり人狼と遭遇したことを話した。香澄ちゃんが最近元気が無かったのは人狼と二日連続で遭遇したから。そして香澄ちゃんを除いた他の四人は香澄ちゃんが二回目に人狼と遭遇した時、初めて人狼と遭遇したという。

千聖 「そうだったのね。怖かったわね」

香澄 「はい……怖かったんですよ……」

涙ぐむ香澄ちゃんを見て千聖ちゃんは話した。

千聖 「香澄ちゃん、話してくれてありがとう。不安だったわね……」

有咲 「あの……ちよっと気になったんですけど……」

彩 「どうしたの？」

有咲 「その……先輩たちももしかして……」

有咲ちゃんの質問に私たちはこっくりと頷いた。見たこと自体は事実だから……

千聖 「実は私たちも人狼を見たわ。」

彩 「その後、人狼からずっと逃げてて、結局千聖ちゃんや私も疲れ  
てて……」

沙綾 「そうですか……」

みんな暫く口をつぐんでいた。

たえ 「この先、どうなるのかな」

沙綾 「人狼を見る生徒が増えるんじゃないかな……」

またの沈黙……みんな口をつぐんだまま……

この先、みんなが人狼と遭遇するのは必然かも知れない。そんな私

たちの頭にはもうひとつの疑問がよぎった。一体誰が人狼なのか……モヤモヤする気持ちやこれからについての思案と共にお昼時間が終わっていく。

人狼姉妹の物語 「第一章：遭遇」 九話 遭遇した者たちの話

(一) 終わり

続く…

## 第十話 遭遇した者たちの話 (二)

蘭 Side

月曜日の朝、家を出たらモカが待っていた。モカの顔はやっぱり昨日の出来事があったのか、疲れた様子だった。あたしも変わらないけど……

モカ 「おはよー、蘭」

蘭 「おはよう、モカ」

モカ 「……………」

蘭 「……………散々だったね」

モカ 「うーん」

蘭 「早く行こう、みんな待ってるから」

あたしたちは簡単な挨拶を済ませてみんなの所へ向かって。

ひまり 「あつ、蘭、モカーー!」

つぐみ 「蘭ちゃん、モカちゃん!」

巴 「おおー、蘭とモカも来たしそろそろ行くか!」

そのまま先に待っていたひまりたちと出会い、学校へ向かった。こうして月曜日の日常が始まった。

<羽丘女子学園 2—A>

巴 「そういえば、蘭とモカ、顔が疲れてるみたいだけど、大丈夫か?」

つぐみ 「そうだよ。蘭ちゃん、モカちゃん、何かあった?」

モカ 「それがねー、今はまだ言えないんだけどさー」

蘭 「昨日は散々だったからね…正直、ありえないことだった」

ひまり 「ありえないことって?」

蘭 「とにかく、今はまだ言える時じゃなくて、昼休みに話したいんだけど、良いよね、モカ?」

モカ 「もちろんー」

ひまり 「わ、わかったよ。何の話しか気になるけど我慢しましよー!」

蘭 「ありがとう」

リサ Side

今日は友希那が当番なのでアタシは友希那と一緒に朝早く学校へ到着した。

リサ 「友希那、鍵持ってきたよ！」

友希那 「ありがとう、リサ」

リサ 「さあ、今日は友希那が当番でしょ？でもアタシも一緒に手伝うからね！」

友希那の当番を手伝う中、アタシたちの話題は以前目撃した人狼へと移した。

リサ 「ねえ、友希那」

友希那 「どうしたの？」

リサ 「アタシたちさ、今まで人狼を小説とかにだけ出ると思ってたよね」

友希那 「確かに、今まで私たちは人狼をそう思っていたわ。でも、あの日は違ったわね」

リサ 「うん……」

初めて人狼と遭遇した日、町に人狼が出るなんて思いもしなかったな。あの日は友希那もアタシもパニックだった。ホントに……

リサ 「それでさ……」

友希那 「人狼がなんでいるか気になるわね」

さすがに友希那も気になったみたいだ。なんでこの町にいるか気になる。それに、人狼の正体が一体誰なのかも気になるし……

リサ 「近くにいるのかな……近くにいれば、正直どうなるか……」

友希那 「……」

リサ 「……」

友希那 「……リサ」

リサ 「？」

友希那 「貴方の気持ちは十分分かるわ」

リサ 「うん……そうだね。友希那も同じだよね」

友希那も正直不安だろう。でもこの話はきつとアタシたちを安心させようとしたんだろう。

友希那 「そろそろみんなが来る時間ね。早く片付けましょう」  
リサ 「オツケー」

友希那 「それに土曜日の話なら昼休みにもっとしましよう」  
リサ 「確かにそうだね。朝にこの話をするのは怖いしね」

アタシたちは今日の当番を終えてそれから午前の日課を過ごした。

蘭 Side

昼休み、あたしたちは屋上へ向かう。

蘭 「実は…信じてくれるかどうか分からないけど…」

つぐみ 「蘭ちゃん、何でも話してよ！私たち、幼馴染みなんですよ？」

蘭 「つぐみ…」

ひまり 「蘭の話、絶対気になるよ！昼休みまでそれ待っていたんだからね！」

蘭 「うん、分かったよ。ありがとう。それじゃ始めるけど、驚かないでね」

みんな沈黙を保ってあたしの話を聞こうとしていた。あたしは深呼吸をして話を始める。

蘭 「実はあの噂のことなんだけど」

巴 「噂？噂なら確か、狼の…」

蘭 「実は昨日、あたしたちその噂の狼と…」

ひまり 「ええっ、ま、まさか、狼と会ったの!？」

つぐみ 「蘭ちゃん、それ本当に!？」

蘭 「あ、会ったけど。それが…」

巴 「それが？」

蘭 「狼なのは合ってるけど、普通の狼じゃなかったよ」

ひまり 「お、狼ってどんな…」

蘭 「人狼」

ひまり 「えええええええっ!？」

巴 「じ、人狼!？」

つぐみ 「そ、そんな…!」

蘭 「あの時、正直あたしやモカは怖くて逃げただけ…」

モカ 「人狼は速いからねー」

蘭 「襲われそうな感じだったから」

ひまり 「確かに噂のことは知ってたけど、人狼だったら話しは別だよお」

つぐみ 「だよね」

友希那 Side

私たちは学校のカフェテリアで昼休みを過ごしていた。

リサ 「そう言えばさ、友希那はあの噂、どう思った？」

友希那 「あこが教えてくれた例の噂のことね。最初はその噂、信じがたいものだったわ」

リサ 「確かに…最初はなんか信じなかったな、アタシも」

最初この噂を私は勿論、リサも信じなかった。狼が町を彷徨くことは考えてもいなかった。

リサ 「でもアタシたち、結局会っちゃったよね…」

友希那 「そうね、結局噂は本当だった。」

リサの言う通り、私たちは人狼と遭遇した。リサは私に気になることを言った。

リサ 「それでアタシ、気になったんだけど…」

友希那 「何が？」

リサ 「人狼ってさ、夜になると狼になるってことでしょ？」

友希那 「それは確かね。夜以外の時は私たちと同じ普通の人間ってこと。もしかしてリサは人狼が私たちの周辺にいるかも知れないって言いたいのかしら？」

リサ 「そ、それは…」

友希那 「今はまだ分からないわ。もう少し考えましょう」

リサ 「うん…」

友希那 「それじゃ、昼休みがそろそろ終わる頃だから教室へ帰りましょう」

リサ 「うん」

昼休みが終わる頃になって私たちは教室へ帰る。この時の私たちはいまだ人狼が誰なのか、分からないままだった。リサは人狼が私た



ちの周辺にいるかも知れないと言う。

リサの言うことが本当だったと分かるまでそんなに時間がかからなかったことを、この時の私たちはまだ知らなかった。

紗夜 Side

放課後の生徒会室、窓の外を眺めながら、私は思索に耽った。

紗夜 「いつかみんな私たちの正体について知るようになったら、その時はどうすれば…」

どうするべきか、それは未だ分からない。その時になると私は……シユワシユワ

紗夜 「電話？」

電話は日菜からだった。

紗夜 「もしもし、日菜？」

日菜 『あつ、おねーちゃん。今日はスケジュールがあるよ！それでちよつと帰り遅くなるよ。』

紗夜 「そう、日程はどうかのかしら？」

日菜 『今日はパスパレのみんなで撮影予定があつて、それが終わったら帰る予定だよ！』

紗夜 「そう、わかったわ。それと……」

日菜 『何、おねーちゃん？』

紗夜 「……くれぐれも気を付けてね」

日菜 『うん、それじゃおねーちゃん、そろそろ切るね！』

紗夜 「ふう……」

燐子 「氷川さん、今日は練習ですから一緒に行きましょう」

紗夜 「そうですね、行きましょう」

生徒会の仕事を片付けた私は白金さんと一緒にスタジオへ向かう。人狼姉妹の物語 「第一章：遭遇」 第十話 遭遇した者たちの話

(二) 終わり

続く…

## 中間解説編と幕間話

### (一) 人狼

人狼<sup>じんろう</sup>：人狼は昼間には人間であり、夜には狼になります。人狼は夜の時、理性を失い完全な狼となつて人間を襲撃します。現在作中に登場した人狼は紗夜と日菜姉妹です。

人狼は月の満ち欠けに影響を受けます。満月に近いほど、人狼の力は強くなります。満月のエピソードは追つて展開しますので、期待してください！

### (二) 人狼と遭遇した人たちと回数

現在まで人狼と遭遇した人たちはPoppin, Partyのメンバー全員、Afterglowの蘭とモカ、Roseliaのリサと友希那、Pastel\*Paletteの千聖と彩です。

遭遇した人たちの中、回数は現在香澄が二回で香澄を除いて人狼と遭遇したメンバーたちが一回です。

### (三) 狼の噂について

このシリーズは『狼の鳴き声の噂』から始まります。作中のメンバーたちが噂を聞いた経緯を説明します。

序章(二)で、あこは巴から狼の噂について聞きます。その噂はあこを通じてRoseliaにも伝わります。巴は周りの誰からその噂を聞いたのですが、巴が誰から噂を聞いたのかは追つて展開する予定です。

### (四) 第一章の展開方向

この章はタイトル通り、ガルパメンバーたちが人狼の氷川姉妹と遭遇するエピソードと遭遇の裏話を語るエピソードが主であります。「第一章：遭遇」の展開方向はメンバーたちが序章にて語られた噂の真相について突き止める話しも含まれますのでその点も見逃さないでくださいね。

氷川姉妹がいつ正体を知らされるかは「第一章：遭遇」が終わつた後、第二章にて語られます。一応「第一章：遭遇」の方を進めることが重要となりますから。

それでは解説編は以上で、ここからは幕間話になります？

日菜 Side

日菜 「それじゃ、つぐちゃん今日の生徒会はよろしく！」  
つぐみ 「はい！日菜先輩、お疲れ様です！」

今日の日課が終わった。この後の予定はパスパレのみんなで雑誌の撮影をすることになった。生徒会のことは副会長であるつぐちゃんに任せて、あたしは麻弥ちゃんと一緒に彩ちゃんたちとの待ち合わせ場所へ向かう。

麻弥 「最近、学校が騒がしいですね。狼の噂でみんな騒いでますよ」

日菜 「確かにね。最近生徒会にも噂についての報告が入って来るしね。そんな報告あったらなんか入ってしないもんね」

麻弥 「狼に襲われないか心配ですね。日菜さんも狼に会わないように気をつけてくださいよ」

麻弥ちゃんの話を噛み締めながらあたしは思案した。

日菜 「もしみんな私の正体を分かっちゃったら、この先どうなるんだらうな？みんなあたしをどう思うだらう……」

麻弥 「日菜さん？日菜さん、大丈夫ですか？」

日菜 「あ、何でもないよ！ちよつと考え事！麻弥ちゃんも気をつけてね。あつ、あそこにみんなが見えるね！」

千聖 「あら、あそこに日菜ちゃんたちが来たみたいね」

イヴ 「本当ですね！マヤさん、ヒナさん！」

彩 「あ、日菜ちゃん、麻弥ちゃん！」

日菜 「お待たせ、彩ちゃん！」

千聖 「みんな集まったわね」

麻弥 「皆さん、浮かない顔ですね」

彩 「うん、さすがに最近の噂もあるから……」

千聖 「私と彩ちゃんもちよつとね……」

彩 Side

昼休み、Poppin' Partyの皆から話を聞いた。昼休みが終わる頃、私たちはポピパのみんなと別れて教室へ戻った。この先こ

の噂がどうなるかわからないまま私たちは学校での日課を終える。

今日はパスパレのみんなで撮影の日程が決まった日だった。放課後、私たちはイヴちゃんと一緒に先に待ち合わせ場所である商店街へ向かう。

商店街へ向かう途中、私たちはイヴちゃんに香澄ちゃんから聞いた話をした。イヴちゃんは私たちの話を聞いて??

イヴ 「ポピパの皆さん、気の毒だったんですね。特にカスミさんは二回も人狼と出くわしたと言っていましたから…」

彩 「そうだよ、人狼と遭遇したらその恐怖が消えないから…」

??イヴちゃんはやはり驚いた様子だった。まあ、無理もない。イヴちゃんに私たちが人狼と遭遇した話しを聞かせたら、イヴちゃんは不安がっていた。イヴちゃんを不安がらせたみたいで私たちはイヴちゃんに謝った。話が進む中、例の噂が話題に出た。

イヴ 「そういえば確か噂のこともありましたよね。アヤさんたちの話からすれば、噂はやはりただの噂じゃないみたいですね」

千聖 「そうだね。この噂はただの噂じゃない。この噂の真実をなんとか突き止めたいわ」

彩 「そうだよね、未だ分からないことが多いよ」

千聖 「(彩ちゃんの言う通り。問題はそこ、どうして人狼が現れたのか、そして人狼は誰なのかを…)」

彩 「そういえば今日の撮影は夜に終わるって聞いたんだけど、大丈夫かな…」

千聖 「彩ちゃん、不安なのは分かるけど、今は撮影に集中しましょう」

彩 「うん…」

イヴちゃんたちと話をしたら、私たちが早く待ち合わせ場所へ到着していた。待ち合わせ場所である商店街で、日菜ちゃんたちを待つてたら、日菜ちゃんと麻弥ちゃんが合流した。

商店街に集まった私たちパスパレはマネージャーであるお姉さんに連れられ、撮影現場へ向かった。

友希那 Side

今日はRoseliaの練習がある日、私たちはあこを連れてスタジオへ向かう。下校の後のスタジオへの途中？

あこ 「あ、今日はAfterglowもCIRCLEで練習があるとおねーちゃんから聞きました！」

リサ 「へー、アタシたちと同じ日かー、偶然だね」

友希那 「確かに。あこ、今日はAfterglowに負けないくらい練習するわよ」

あこ 「はい！より一層がんばります！」

リサ 「そういえば、今朝モカと蘭を見かけたんだけど、何かモカと蘭浮かない顔してたなー。気になるね」

友希那 「二人とも、気になることは後で聞きましょう。スタジオについてたわ」

スタジオへ着いた私たちはCスタジオへ入った。

友希那 「隣子たちが到着する前に準備をしましょう」

あこ 「はい！」

紗夜 Side

スタジオへ向かう途中、白金さんの携帯にメッセージが届いた。

隣子 「あ、友希那さんからのメッセージですね……」

紗夜 「湊さん、メッセージでは何と？」

隣子 「ええつと……」

友希那 『私たちが先に到着したので、一先ず準備をして待っているわ。スタジオはCスタジオよ』

紗夜 「そうですか。では私たちも早く行きましょうか」

隣子 「はい……」

メッセージを確認して私たちは足を速めた。

隣子 「そういえば最近噂でみんな騒いでますね……氷川さんも気をつけましょうね……」

紗夜 「ええ、白金さんも」

紗夜 「(白金さん、そう言ったけれど、私の正体を知ったらあなたやRoseliaの皆さんは……)」

どうなるかわからない不安を抱えながら、私たちはスタジオへ到着

した

人狼姉妹の物語 「第一章：遭遇」 中間解説編 終わり

続く：

## 第十一話 Pastel\*Palettesの遭遇

彩 Side

今日はパスパレが雑誌の撮影をする日だ。撮影の前に担当スタッフさんと出会った。

パスパレ 「「「よろしくお願いします!」」」

撮影スタッフさんに挨拶を送って、私たちはスタッフさんの案内を受ける。

日菜 「今日はどんな撮影をするんだろうね、るんってする撮影ないかな?」

イヴ 「そうですね、なんかブシドーが沸いてくる撮影はないんですかね?」

彩 「そういえば、今日のテーマは春の花畑をテーマにして撮影するってマネージャーのお姉さんから聞いたよ!」

日菜 「春の花畑?るんってする撮影だね!」

イヴ 「素敵な撮影ですね!」

千聖 「さあ、さあ、みんな撮影の準備をしましょう」

そして、私たちが向かった撮影場所には??

彩 「わあー、素敵、綺麗ー!」

千聖 「こんな綺麗な場所で撮影するなんて、素敵なことね」

イヴ 「素敵な撮影になりそうですね!」

撮影を前に、私たちは目の前の花畑に目を奪われた。その光景は素敵な庭を見たような感じだった。

彩 「花がいっぱい、素敵ね!」

イヴ 「とっっても素敵です!」

千聖 「スタッフさんから話を聞いたんだけど、今日の撮影は春をテーマにするらしいわ」

彩 「じゃあ、ここにある花は全部春に咲く花なのかな?」

麻弥 「素晴らしいですよ。この場所は撮影スタッフが選んだ場所らしいです!」

千聖 「あら、それならそのスタッフさんに感謝しないとね」

イヴ 「そういえばマヤさん、ヒナさんはどうしたんですか？」

千聖 「日菜ちゃんも花畑に夢中みたいね。気持ち良さそうだしね」

日菜 「本当、素敵な場所だねー！るるるんってする！おねーちゃんにも後で誘っちゃおうか！」

日菜ちゃんも撮影場所の写真を取っていた。花畑に夢中な中、千聖ちゃんがとある花に注目した。

千聖 「この花は何かしら、初めて見る花ね」

彩 「そうだね、何の花なのかな」

イヴ 「写真で検索したらイキシアって名前の花らしいですね！」

彩 「へー、そういう花もあるんだ、初めて知ったよ」

麻弥 「ここはそのイキシアって花だけあるんじゃないみたいです。ここにライラックもありますよ」

イキシアにライラック、アカシアも、本当に色々な花に私たちは魅了された。

千聖 「さあ、花の見物は後にしてそろそろ準備をしましょうね。」

日菜ちゃん？」

日菜 「うん、今行くよ！」

暫くして……雑誌の撮影が始まった。花畑での撮影は賑やかな雰囲気になっていた。インタビュで私が噛んでしまったこともあつたけど撮影は楽しく進んでいた。

千聖 Side

撮影の後に訪れた休憩、私たちはまだ見果てぬ花畑の見物を続けた。素敵な花畑で一本の木が私の目に入った。杏の花、これが花畑にあるなんて不思議に思った。

千聖 「杏の花……不思議ね」

彩 「千聖ちゃん！こつちに来て一緒に写真撮りましょうよ！」

千聖 「分かったわ、彩ちゃん！」

彩ちゃんと呼び声に私はちよつと考え事をやめて、彩ちゃんに向かう。

彩 「ねえねえ、千聖ちゃん、ここの花畑、見るだけで気持ちが良い



よ！」

千聖 「そうね、どれも綺麗な花畑だわ。後で花音も誘いたいわ」

彩 「じゃあ、後でスケジュールがない日にここにもう一度来ようかな？」

千聖 「それは良いと思うわ。こんなに綺麗なところ、一度だけ来るのはもったいないわ。」

彩 「スタッフさんから聞いたんだけど、ここの花畑は季節が変わる度、管理人さんが色んな花を植えるって！あ、それからそれから？」  
彩ちゃんの話聞いて、私はここへもう一度来たいと思った。もちろん、スケジュールがない日に花音とも来たいと。

彩 Side

休憩が終わり、撮影が再び始まった。撮影の雰囲気は前よりもっと賑やかになっていた。

撮影が終わる頃には日が暮れていた。いつの間にか、時計は7時を指していた。

彩 「撮影、みんなお疲れ！」

イヴ 「はいっ、お疲れ様です、アヤさん！」

千聖 「撮影が終わったら、もう7時になったわね」

麻弥 「もうすっかり日が暮れましたね」

彩 「そうだね…でも、とても素敵な撮影になれたね！」

イヴ 「確かに！素敵な場所でしたね！」

撮影の話が熟するなか、何故か日菜ちゃんの様子が妙だった。

彩 「あれ、日菜ちゃん？」

日菜 「何、彩ちゃん？」

彩 「そ、その…日菜ちゃん、大丈夫？」

千聖 「撮影中は大丈夫だったけれどね……」

イヴ 「ヒナさん、大丈夫ですか？」

麻弥 「なんか、焦ってるみたいですけど、どうしたんですか？」

日菜 「あ、おねーちゃんにね、ちよつと遅くて帰るって言ってるね」

彩 (そういえば、休憩中に日菜ちゃんは紗夜ちゃんに、そのような電話をしていたな)

日菜 「それで、今いる場所が家からちよつと離れてるから遅れるよつておねーちゃんに言つてたよ」

彩 「そ、そうだったんだ…」

日菜 「じゃあ、あたしは帰るね！」

千聖 「お疲れ、日菜ちゃん」

家へ帰る不安な日菜ちゃんの後ろ姿を見て、私も焦つた。最近噂になつてゐる人狼のことがあるから…

それから、私たちはコンビニに寄つて、おやつをかう。おやつを食べながら、お互い話を交わした。話を交わす最中にもみんなは人狼について不安を抱いていた。

彩 (みんな、無理もないよね…)

アウウウウー

彩 「えっ?」

狼の鳴き声で、私たちは人狼が来たことを理解した。

麻弥 「ええっ!? もう来たんすか?」

千聖 「そうみたいね…」

彩 「た、確か…麻弥ちゃん、走るのは苦手…」

麻弥ちゃんはパスパレの中で走るのが苦手だ。もし人狼と遭遇してしまつたら、麻弥ちゃんは人狼に捕まっちゃうのかも知れなかつた。

イヴ 「マヤさん、今は走りましょう！」

千聖 「そうね、麻弥ちゃん、走るのが苦手だけど、今は走るしかないわ。できる?」

麻弥 「は、はい…」

そして、みんなが人狼を避けて走る最中に、イヴちゃんが何かを見て驚いた。

イヴ 「ひっ!」

彩 「イヴちゃん、どうしたん…えっ」

イヴちゃんの驚く声に私たちも驚く。なぜなら?

『Grrrrr…』

千聖 「じ、人狼!？」

目の前にあった。まるで私たちを待っていたように？

『Grrrrrrraaahh!!』

人狼は素早く私たちに襲いかかってきた。

イヴ 「きやあああああ！」

なんとしても人狼から逃げなければならぬ。そう思った私たちは全力で走った。でも

彩 「は、速いよ！」

千聖 「ええっ!?!」

人狼の速度は私たちよりも速かった。幾ら走っても、このままじゃ追い付かれるのが必至だった。

麻弥 「はあ、はあ、はあ………」

千聖 「麻弥ちゃん!?!」

彩 「はあ、はあ、はあ………」

イヴ 「アヤさん！」

彩 「も、もう……走るの………」

麻弥ちゃんも、私も走り過ぎたのか、息苦しかった。

彩 (もつと走らないといけないのに……でももう息が……)

後ろには人狼が私たちを追っていた。このままじゃ人狼に襲われると思った。そして、そう思った矢先？

「?丸山さん」

ガシッ

彩 「えっ?うわあっ!?!」

イヴ 「あ、アヤさん!?!」

?? 「静かに、こつちよ」

急に誰かの手が出たと思ったら、私を捕まえた。この手は……

彩 「……えっ?友希那ちゃ………」

友希那 「説明する時間はないから、早くこつちへ！」

イヴ 「は、はいっ！」

千聖 「麻弥ちゃん、早く！」

麻弥 「は、はいっ………」

友希那ちゃんの言う通り、ひとまず人狼の目につかないように暗い

路地裏へ私たちは急いで身を隠す。

彩 「えっ？リサちゃんも？どうして？」

リサ 「あ、彩たちと同じ理由で逃げているけどね……」

千聖 「同じ理由？」

リサ 「今は静かにして、人狼が聞いているかも知れないから……」  
リサちゃんの言葉でどういうことなのかはなんとなく察したけど、今は聞かないことにした。リサちゃんの言う通り、今は息を殺すしかなかった。人狼がどこから来るか分からないから……

千聖 「ここから出れば、直ぐに人狼に狙われるわ……そうしたらみんな終わり……」

今は千聖ちゃんの言う通りだった。外は人狼がまだ彷徨っている。

燐子 「あ、あの……」

あこ 「り、りんりん、今は静かに……」

燐子 「あ、足音が……」

彩 「えっ？」

リサ 「あ、足音？」

燐子 「は、はい……その……二人分の……」

二人分？ということとは人狼は一人だけじゃないってことなのか？考え事をしている間にイヴちゃんが話しかける。

イヴ 「あ、あの……いつまで待てば良いんでしょうか……？」

千聖 「イヴちゃん、今は我慢して……！いつ人狼がこっちへ来るか分からないから……！」

麻弥 「イヴさん、今は……静かに……！」

千聖ちゃんの言う通り、どこから来るか分からないまま沈黙が続く  
中？

あこ 「あ、あの……」

リサ 「どうしたの、あこ？」

あこ 「あこ、この路地裏、反対の方へ出られるんじゃないかって思うんだけど……」

千聖 「確かに反対側へ通じる道があるみたいだけれど……まずはあの人狼たちの注意を逸らさないと……」

彩 「ところで……私、気になったんだけど……リサちゃんたちももしかして……」

リサ 「う、うん……そのことはまずここを抜けてから話すね……」  
友希那 「燐子、足音は聞こえてるの？」

燐子 「は、はい……」

リサ 「はあ……参ったね……」

イヴ 「一体、どうすれば良いんでしょうか……？」

彩 （確かに反対側へ通じる道がある。でも、人狼が私たちの動きに気づくのか気になる……）

みんながどうやってここを抜けるか考える最中だった。その時？

あこ 「あ、足音？」

リサ 「えっ!?ちよつ、あこ、何言ってるの!？」

彩 「り、リサちゃん……あこちゃんの言う通りだよ……私たちが外に一体誰が……」

リサ 「うう……」

足音が聞こえてるといふ言葉に私たちは再び息を殺す。人狼が来たのか、それとも別人なのか、未だわからなかった。足音は益々大きくなった。

そして間もなく？

「?見つけました」

人狼姉妹の物語 「第一章・遭遇」 第十一話 Pastel\*P  
a l e t t e s の 遭 遇 終 わ り

続く……

## 第十二話 Roseliaの遭遇

燐子 Side

CIRCLEに到着した私たち。練習を準備するみんなの雰囲気  
がいつもとは違う。今井さんや友希那さんは特にそうだった。

友希那 「それじゃ、始めようか。まずは一曲目から？」

??練習はいつも通り順調だった。みんなの演奏と友希那さんの歌  
声はいつも通り。でも？

燐子 (今井さんと友希那さん……どこか不安そう……)

今井さんと友希那さんの不安そうな表情を私は読めた。あの二人  
に何か良くない事でもあったのか、気にかかる。

「?……ん、りんりん！」

燐子 「……」

あこ 「りんりん！」

燐子 「あつ……あ、あこちゃん……」

あこ 「りんりん、ボーツとしててどうしたの？」

燐子 「ご……ごめん、ボーツとしてたの？」

リサ 「珍しいね。燐子がボーツとするなんて」

紗夜 「白金さん？」

燐子 「あ、だ……大丈夫、です……」

紗夜 「そう……」

そう答える氷川さんの表情もなんだか不安そうに見えた。今井さ  
んや友希那さんもそうだったけど、いったいみんな何があったのかな  
:

リサ 「でも一曲目の練習を始めたばかりなのに、なかなかやる気  
が出ないみたいだね……」

あこ 「それに、みんないつもと違って暗そうだし……」

友希那 「……」

燐子 「……」

今井さんの言う通り、一曲目の練習を始めたばかりなのに雰囲気は  
いつもと違って暗い。このままじゃ練習の雰囲気が出ない。

リサ 「……じゃあ、一旦休憩にしましょうか？」

友希那 「そうね、一旦休憩にしましょう」

今井さんの提案でひとまず休憩に入る。

【CIRCLE カフェテリア】

休憩に入つてカフェテリアに出ていると、Afterglowのメンバーたちもここにあった。

リサ 「あれって……Afterglowのメンバーたちじゃない？」

友希那 「そうね。みんな集まって何か話しているのかしら？」

あこ 「そうですね…皆、真剣な顔で……何かあったのかな？」

隣子 「……………」

リサ 「さ、さあみんな、休憩だから、考えるのは後にしようね、ね？」

友希那 「そうね、まずは注文をしましょう」

考えるのは後にして、私たちは一旦、カフェテリアでメニューを注文することにした。その時？

あこ 「？あれ？」

隣子 「どうしたの、あこちゃん？」

あこ 「紗夜さん？」

リサ 「え？」

あこ 「紗夜さん、いまブーツとしてるよ…」

友希那 「…………？」

あこちゃんの疑問で振り向くと、氷川さんは何故かブーツとしていた。

紗夜 「……………」

友希那 「…………紗夜？」

リサ 「紗夜？おーい」

紗夜 「……えっ？あつ、すみません、今行きます」

Afterglowを見つめる時の氷川さん、私たちが氷川さんを呼んだ時の氷川さんの視線は何か焦っている視線だった。

リサ Side

カフェテリアで注文したメニューを待っている間、アタシ達は最近の話を交わした。

リサ 「そういえば、みんな夜になる前にちゃんと帰る？」

燐子 「そうですね……最近は何かがあるから……早く帰ろうと思うんです……」

あこ 「あこも早く帰ってくるようにとおねーちゃんに言われて早く帰ってるんだ！」

友希那 「そう、それはよかったわ」

燐子 「あの……今井さんと友希那さんは大丈夫ですか……？」

リサ 「あ、あたしは……」

友希那 「その……」

あこ 「どうしたの、リサ姉？友希那さんも？」

「お待たせしました、注文したメニューです！」

あこ 「あ、メニューが来たみたい！あこが持ってきましたね！」

なんか話をしようにも迷っちゃう……きつとみんなを不安にさせる話んだけど……そう心配していたところ？

友希那 「？話しましょう、リサ……」

リサ 「友希那？」

友希那 「今は話すのが一番よ」

リサ 「でも、みんなに不安を与えるのは……」

友希那 「大丈夫、それは心配だけれど、今は情報の共有が一番だから」

リサ 「だ、だよね……」

あこ 「メニュー持ってきました！」

友希那の言葉に頷いたアタシはちょうどあこも来たので話を始めた。

リサ 「実は、アタシたち、最近の噂がただの噂じゃないって思うんだ……」

燐子 「噂、ですか……？」

あこ 「どうして、そう思ったの？」



リサ 「うん……実はアタシたち……この前人狼と会っちゃって……」

あこ 「!!!」

燐子 「!!!」

紗夜 「!!」

それと同時にフォークが皿に落ちる音がした。その音に視線を向けると、紗夜だった。そしてアタシの話を聞いた瞬間、紗夜の手は震えていた。

リサ 「えっ、さ、紗夜？」

燐子 「氷川さん……？」

友希那 「紗夜、あなた手が震えてるみたいだけど、大丈夫？」

あこ 「さ、紗夜さん、大丈夫ですか？」

紗夜 「……はっ、す、すみません……あまりにも驚いてしまつて……」

友希那 「そ、そうかしら？」

リサ 「紗夜、本当に大丈夫？」

紗夜 「だ、大丈夫です……本当に大丈夫です……気にしないでください……」

リサ 「そ、そう？なら、話続けるよ？」

紗夜 「え、ええ……どうぞ……」

この時の紗夜の反応を見て、アタシは紗夜が何かに焦っていることに気がついた。紗夜を見つめる友希那の視線もアタシと同じだった。

リサ 「それでアタシたち、あの日は眠れなくて……」

友希那 「あの日は、本当に大変だったわ」

あこ 「大変だったんだね……」

燐子 「でも……その話が本当なら、これはただの噂じゃないんですね……」

友希那 「ええ、この噂はただの噂ではないわ。今は不安になるかもしれないけれど、こういう時は情報を共有するのが一番よ」

あこ 「はいっ！」

紗夜 「……」

リサ 「……さあさあ、暗い話しはひとまずここまでにしませう！せつかく注文したデザート、早く食べましょうね！」

友希那 「そうね、早く食べて練習に戻りましょう」

リサ 「ほら、みんな早く食べましょう！」

燐子 「は、はい……」

みんなで注文したデザートを食べているところに燐子が紗夜に話しかけた。

燐子 「あの…氷川さん……本当に大丈夫ですか……？」

紗夜 「白金さん、ありがとう。私は大丈夫よ」

燐子 「はい……分かりました……」

紗夜を心配する燐子の表情。紗夜は大丈夫と言ったけど、紗夜の中には心配と焦りが見えていた。話を終えたアタシたちはメニューを片付けて、練習に戻った。

【C i R C L E スタジオ】

休憩を終えて戻ったスタジオ。みんなが練習を再開した。練習はいつもと同じ、だったけど雰囲気はいつもと違った。みんながああ、のせいで不安になっている。さすがにこのままじゃ練習をする雰囲気じゃないみたいだ。

友希那 「ふう……雰囲気が出ないわね……」

リサ 「うん……あの…紗夜、本当に大丈夫？」

紗夜 「……大丈夫です」

燐子 「氷川さん……何かありましたか……？焦っているように見えるんですけど……」

紗夜 「本当に大丈夫です……あの……すみません……今日は先に帰ります……」

そう言った紗夜は先に帰った。紗夜が出てから、スタジオには沈黙が続いた。

リサ 「……どうする、友希那？」

友希那 「今日は練習がなかなかできないわね…これじゃ、練習を再開しても同じだわ。」

リサ 「確かに……」

友希那 「一旦、私とリサは次の予約をしてくる。あこと燐子は後片づけをしてちょうだい」

燐子 「はい……それじゃ、あこちゃん……」

そうして友希那とスタジオから出てロビーに行くところだった？

「？湊さん」

誰かが声をかけて振り向いたら？

友希那 「？あら、美竹さん。奇遇ね、どうしたのかしら？」

蘭 「あの、湊さんとリサさんに話があります」

リサ 「話？」

蘭 「その…話を聞いたんですけど」

友希那 「話？さつきカフェテリアでした話、聞いたのかしら？」

蘭 「はい、実はAfterglowのみんなと話をしている最中にRoseliaの皆さんの話を聞いたので……」

リサ 「そっか……」

友希那 「それで、なんで私たちを呼んだのかしら？」

蘭 「それが…人狼と遇ったんですか？」

リサ 「えっ？」

リサ (蘭が話したいことが人狼のことなら、蘭は人狼と会ったのかな?)

リサ 「あ、会ったよ、確かに……」

友希那 「それで、美竹さんはなんで私たちにそれを聞くのかしら？」

蘭 「実は、私たちも人狼と遇ってました」

リサ 「えっ、本当に!？」

友希那 「今の話、本当なのかしら？」

蘭 「ほ、本当ですよ!あの時、モカも一緒に居たので……」

リサ 「えっ、モカも見たの!？」

その話を聞いた瞬間、アタシたちは互いに向き合った。

リサ 「ゆ、友希那……」

友希那 「……思わなかったことだわ……」

蘭 「その……人狼について知っていることはありませんか？」

蘭の問いに友希那は落ち着いて答える。

友希那 「ごめんなさい、私たちも人狼と遇ったのは初めてよ。それで人狼について知っていることは少ないわ」

蘭 「そ、そうですか……実は私たちも知っていることが少ないので……」

リサ 「そっか……」

友希那 「とにかく夜道は気をつけなさい。夜になると、人狼が動くから」

蘭 「はい、湊さんもリサさんも気をつけてください」

蘭はその言葉を残して自分のスタジオに入った。

リサ 「蘭とモカもあつたなんて、本当に怖かったみたいだね……」

友希那 「私たちも気をつけましょう」

リサ 「うん……そうだね……あ、そうだ次の予約早くしますか！」

友希那 「そうね」

友希那 Side

練習をいつもより早く終えた私たち。あこがファミレスに行きたいと言つて、私たちはファミレスへ行つた。注文したメニューを待っている間、あこが何かを話した。

燐子 「そういえば私、気になることが……」

リサ 「何、燐子？」

燐子 「氷川さんのことで少し……」

友希那 「紗夜が？」

燐子 「はい……」

燐子はそう答えながら、紗夜が気になる理由を話した。After glowを見た時に焦っていた紗夜や人狼の話題が出た時の紗夜の反応を……

あこ 「じゃありんりんは紗夜さんに何かがあるって言いたいの？」

燐子 「うん……」

リサ 「紗夜、本当に何かあつたのかな？」

友希那 「そういうのは後で紗夜に聞きましょう」

燐子 「は、はい……」

リサ 「でも紗夜、本当に大丈夫かな？」

友希那 「……………」

「お待たせしました！Wハンバーグとご飯大盛デザートセットです！」

リサ 「あ、ありがとうございます」

あこ 「わあ、いっただきまくす！」

リサ 「はいはい、友希那も早く食べてね！」

友希那 「ええ」

あこ 「そういえばりんりん、今日のNFOはどうするの？」

燐子 「今日はお休みかな……」

あこ 「そっか……」

ファミレスでの食事の間にリサが私に話しかける。

リサ 「友希那、さっきの燐子の話、どう思う？」

友希那 「本当に燐子の言う通りなら、関係があるのは間違いないけれど、まだ確証はないわ」

リサ 「そ、それもそうだけどね……」

友希那 「リサ、今はもう少し考えましょう」

リサ 「そ、そうだね……」

それから私たちはファミレスでの食事を終えた。ファミレスから出ていくと、日が沈み始めた頃だった。

友希那 「日が沈み始めたわね」

燐子 「そうですね……あの、リサさん……」

リサ 「どうしたの、燐子？」

燐子 「ひとまず……みんなと一緒に帰りましょうか……」

友希那 「燐子……」

燐子のお願いで一先ず一緒にみんなに帰ることにした。

## 【帰り道】

リサ Side

リサ 「日が沈むの、早いね…」

友希那 「そうね……」

帰り道。みんなで一緒に帰るのだけど、日はすでに沈んだ。

リサ 「できるだけ遅く帰らなければいいんだけどね……」

友希那 「気をつけましょう。人狼はどこから出るかわからないわ」

あこ 「あの、友希那さん……」

友希那 「どうしたの、あこ？」

あこ 「その、人狼が来る前に、どこかに隠れた方がいいんじゃないですか？」

友希那 「どこかに隠れる？隠れる場所があるのかしら？」

燐子 「路地裏に隠れば良いんじゃないかな……？」

リサ 「そ、そうだよ……今はとにかくどこかに隠れよ！」

アウウウウー

友希那 「……！どうやら人狼が動き始めるみたいね」

リサ 「ええ!?もうそんな時間なの!？」

友希那 「とにかく、今は隠れる場所を探しましょう、どこで会うかわからないから」

アタシたちはとにかく隠れる場所を探し始めた。

あこ 「あの、もし人狼に追われたら、どうすれば良いの、りんりん？」

燐子 「も、もし追われていたら……後ろを見ないで走らなきゃ、だよね……」

友希那 「その通りよ。後ろを見れば、人狼はもつと速く私たちを追いかも知れないわ」

リサ 「はあ、それにしても、早く隠れる場所を探さなきゃ……」  
みんなで歩いてる中、どこからか足音が聞こえた。

燐子 「えっ……足音……？」

リサ 「そうだね、アタシも聞こえたよ」

友希那 「足音がするのは分かるけれど、いったいどこからかしら？」

あこ 「あこ、すごく気になります!」

リサ 「なんだか、足音が段々大きくなるような……」

友希那 「今はみんな落ち着いて?」

友希那が落ち着いて行きましようと言おうとした時だった。

『Grrrrr…』

リサ 「っ!」

後ろから聞こえた鬼気迫る獣の声。その声にアタシはこう言った。

リサ 「に、逃げよう……みんな……」

友希那 「リサ?」

リサ 「早く逃げようって!」

『Grrrrraaaaahhh!!』

そう、人狼がアタシたちの後ろにいる。振り向かなくても人狼の唸り声が聞こえたのだから分かる。それで今はとにかく逃げるのが一番だ。でも??

あこ 「はあ、はあ、はあ……」

燐子 「あこちゃん、もうちよつと頑張つて……!」

あこ 「わかつてるよ……!でも、あの人狼、速いつて……!」

そう、今アタシたちを追っている人狼がアタシたちより速い。このままでは追いつかれるのは時間の問題かと思った。しかしみんながそう思ったその時だった?

友希那 「……っ!!あっちよ!」

あこ 「えっ、友希那さん!」

アタシたちは見た、どこか身を隠せる場所を。でも、逃げ切るのでアタシたちは精一杯だった。そして人狼はアタシたちとの距離を詰めていた。

リサ (も、もうダメ……でも、逃げなきゃ……!)

そしてどれくらい走つたのか、アタシたちはようやく身を隠せる場所にきた。一人二人くらいは十分に入れるくらいの狭い路地裏に。アタシたちは、なるべくみんながちやんと入れるように落ち着いて路地裏に入った。後ろは振り向かず。人狼は路地裏へ入るアタシたちを見ては唸り声を出してどこかに消えた。一旦身を隠せたけど、ア

タシたちはどこに再び現れるか心配するほかなかった。

友希那 Side

【路地裏】

どうにか隠れる場所を探して身を隠せたけれど、さすがにみんな息切れだった。

リサ 「はあ、はあ、はあ……」

燐子 「どうにか……隠れましたね……」

あこ 「はあ、はあ、はあ……もう息切れだよ……！」

燐子 「あ、あこちゃん……今は静かに……！」

リサ 「そ、そうだよ、あこ！大声を出したら人狼が……」

友希那 「そ、そうよ。はあ、はあ、はあ……このまま追って来なければいけない……」

このままだったらみんな人狼に襲われて終わりだ。みんながそう思った。

リサ 「さ、さすがに怖いね、人狼……」

友希那 「ええ……これで二回目かしら……」

再び遭遇した人狼、やっぱりその恐怖は私たちの中に強く残っている。そして今は隠れているけれど追われているのは紛れもない事実。あの人狼からどうやって逃げるか、良い案が浮かびそうにない。いつたいどうすればいいのかと考えていたその時だった？

「？きやあああああー！」

もう一人の悲鳴、私たちはみんなその悲鳴を聞いて驚く。

リサ 「えっ、悲鳴!?!誰?!」

友希那 「リサ、大声を出さないで。人狼に見つかるから」

リサ 「で、でも……」

そして声は益々大きくなる。どうやら私たちの近くにいるみたいだ。

「は、速いよー！」

「ええっ!?!」

燐子 「この声って……丸山さんと白鷺さん……?」



リサ 「ええっ!?!?彩と千聖が!?!?ってことは彩たちも!?!?」  
燐子とリサの会話から推測すれば、丸山さんと白鷺さんも人狼に追  
われているみたいだ。

友希那 「これは、あの二人を助けないと……」

リサ 「で、でもどうやって?」

あこ 「そ、そうですよ!ここから出れば、きっと人狼が?」

「麻弥ちゃん!?!?」

リサ 「!?!?」

燐子 「大和さんも……!?!?」

「はあ、はあ、はあ……」

「アヤさん!」

「も、もう……走るの……」

今はPastel\*Palettesのみんなが危ない。そう  
思った私は一旦出て、声の主を呼んだ。

友希那 「丸山さん」

リサ 「って友希那!?!?」

燐子 「友希那さん、何を……」

そして手を出して丸山さんの腕を掴み、こっちへ連れてくる。

彩 「えっ?うわあっ!?!?」

イヴ 「あ、アヤさん!?!?」

友希那 「静かに、こっちよ」

彩 「……えっ?友希那ちゃ……」

友希那 「説明する時間はないから、早くこっちへ!」

イヴ 「は、はいっ!」

千聖 「麻弥ちゃん、早く!」

麻弥 「は、はいっ……!」

別の道から逃げていた人々をなんとかここへ連れてくる。やつぱ  
り追われていたのはPastel\*Palettesの四人だった。

リサ 「やつぱりPastel\*Palettesだったね……」

ふう……って四人?」

友希那 「そうね、一人がいない。日菜は今一緒じゃないのかしら

？」

彩 「あ、うん……って、リサちゃんもいる？どうしてここに？」

リサ 「あ、彩たちと同じ理由で逃げているけどね……」

千聖 「同じ理由？」

リサ 「今は静かにして、人狼が聞いているかも知れないから……」

千聖 「ここから出れば、直ぐに人狼に狙われるわ……そうしたらみんな終わり……」

そう、今ここから出れば、その瞬間終わりだ、ここにいるみんなが。みんなが焦っている中で、燐子が何かを話した。

燐子 「あ、あの……」

あこ 「り、りんりん、今は静かに……」

燐子 「あ、足音が……」

彩 「えっ？」

リサ 「あ、足音？」

燐子 「は、はい……その……二人分の……」

まだ人狼が彷徨ってるから、足音の正体は人狼かもしれない。みんながそう思った。そして二人分だという燐子の言葉に私はふと何かに気づく。

友希那 (二人分ってことは、人狼は一人だけじゃないってことかしら？つまり人狼は、私たちを追っていた人狼とパスパレの四人を追っていた人狼の二人ということかしら？)

あこ 「あ、あの……」

リサ 「どうしたの、あこ？」

あこ 「あこ、この路地裏、反対の方へ出られるんじゃないかって思うんだけど……」

この路地裏の反対側なら、確かに逃げ切れるかもしれない。けれど、一番の問題を言えば？

千聖 「確かに反対側へ通じる道があるみたいだけれど……まずはあの人狼たちの注意を逸らさない……」

そう、人狼は未だ彷徨っていて路地裏から出た私たちを待っているかもしれない。だから反対側から出るのは慎重にしないとだつた。

彩 「ところで……私、気になったんだけど……リサちゃんたちももしかして……」

リサ 「う、うん……そのことはまずここを抜けてから話すね……」  
私は燐子にさっきの足音はまだ聞こえるか尋ねてみた。

友希那 「燐子、足音は聞こえてるの？」

燐子 「は、はい……」

リサ 「はあ……参ったね……」

イヴ 「一体、どうすれば良いんでしょうか……?」

みんながどうやってここを抜けるか考えている最中だった。

あこ 「あ、足音？」

リサ 「えっ!?ちよつ、あこ、いきなり何言ってるの!？」

彩 「り、リサちゃん……あこちゃんの言う通りだよ……私たちが外に一体誰が……」

リサ 「うう……」

あこの言葉に私たちは再び息を殺す。人狼が私たちをみつけて来たのか、それとも別人なのか、未だわからなかった。そう考えている中、足音は益々大きくなった。

「?見つけました」

足音の正体が声を出した。

人狼姉妹の物語 「第一章：遭遇」 十二話 Roseliaの遭

遇 終わり

続く……